

△座談会▽

福生町役場

出席者

上野 重勝（現職員）

木村 シズ子（"）

高水 求（"）

松尾 米子（"）

森田 猛（"）

貫井 喜代次（元職員・福生市議会議長）

司会

生子 国利（現職員）

はじめに

昔の子どもが遊びの中で使った言葉に、「わかんねえことは役場にいつて、聞いてこうよ。」と

いうのがあった。我々住民にとって、もともと身近な、毎日の生活に欠かすことのできないお役所の役場。

福生の町役場。昭和二十一年に職員は一五名であったという。それから三〇年を経て、現在の職員総数は三九六名である。

この三〇年、町の様相も大きく変わった。役場から市役所となり、庁舎もデラックスになった。そして、その外観につれて、内側の変遷も多様だろう。それらについて、古参の幹部職員に語ってもらった。

役場入りのこと

司会 はじめに、皆さんが福生町役場に入った、その事情などからうかがっていきましょう。

貫井 戦争から帰ってきて、しばらく家で百姓などしながらぶらぶらしていた。二十一年四月だった、役場から加藤市蔵氏（町助役）がこられて、「役場へきてくれないか。」という。それもあしたからだ、というから、まあ待ってくれと言って五月一日から出た。

当時、川辺堅一氏が収入役で、税務の關係に人がいないから、それをやれという。それまで私は、軍隊に一五年間もいた人間で、しゃばの空氣がまるつきりわからない。とにかく出かけてみたら、税務の主任でいきなり書記という身分です。村野マリ子さんが係りで私と二人だった。と

ところでしばらくは、税務署や地方事務所から電話がかかってきて、国税がどうの、都の付加税がこうの、というが、聞いていてもさっぱりわからない。しばらくして役場には、夏の半ドン勤務制の時期がきたが、私だけは、毎日夕方おそくまで残って、仕事にしがみついていた。

高水 私も軍隊から帰って、二一年の六月ごろでしたが、麦刈りなんか手伝っていたら、役場で人が足りないからこないか、ということだった。そのころ、服部収道氏が戸籍主任で、斎藤忠蔵氏が寄留と学事の方をやっていた。斎藤さんは人がくると、こう眼鏡ごしに上目づかいする人でね、いつもきちんと袴をはいていておっかない人でした。当時、戸籍謄本なんか申込んでから、三・四日たたないといけない。それをつくるのに読み合せをするのだが、まわりが皆大先輩ばかりで、頼みにくかったものです。女性では、小林春子さん、細谷米子さん、村野マリ子さん、田村貞子さん、井上清子さんがいました。

森田 私も二一年の十一月からです。家の百姓仕事など手伝っていたのだが、役場へこないかとすめられて出かけた。それでは様子を見に、というつもりで行ったら、加藤市蔵さんが、「ああきたか。すぐに履歴書を書け。」という。それで書き終わって帰ろうとしたら、「帰らねえで仕事をやっていけ。」という。商業学校出身だからそろばんが達者なんだろう、なんて伝票計算をやらされたんです。入った時は雇いで、まもなく二二年三月三十一日付で、高水君と二人が書記補になった。主任になるには、書記補でなければならなかったのです。

貫井 私が入った時の辞令には、二百円を給する、と書いてありました。戦争中、兵隊はただ働きだ、なんて言われていましたが、私は軍隊で二七〇円だったんです。それが月給二〇〇円だから、ずいぶん安かったですよ。しばらくして川辺さんに退職を申し出たんです。そしたら、来月は月給があがるからという。それで退職を思いとどまった。

森田 あのころ、一二月になって今でいえばボーナスが出る月です。でも出そうもない。上の人が言っていることに「何か少しは呉んきやあ、しょうがんめえ。」ということで、すこし出た。月給は一二月には四六〇円になっていました。

貫井 そうだな、わたしも暮には七〇〇円になった。

司会 そういうふうに声をかけられた人については、役場の中で推薦か何かがあつてですか。

貫井 そんなことはなかったですよ。町長さんといっても、当時はほとんど役場にこなかった。助役さんだっている日が少なかつた。

司会 では、課長さんですか。

高水 課長はなかったですよ。そんな制度ができていなかった。まあ、だれかの推薦はあつたでしょうね。

森田 当時、役場へつとめるといっても、給料はいくらだの、超過勤務手当は出るのか、有給休暇があるか、そんなことぜんぜんわからぬままでした。

貫井　そういうもの、なにもなかったですよ。でも夏は今の期末手当に変わるもので、ソーメン代をくれたんです。正月は餅代という名目でした。

上野　試験制度ができたのは、私なんかのころからでしたよ。私も人にすすめられて役場へ履歴書を出した。二四年の八月でした。五・六人で試験を受けて三人入ったんです。試験官は内田勇氏だった。「おめえはそろばんができるか。」って聞かれたので「人なみにはできません。」って答えておいた。採用になってから、おめえは税務課だって言われた。そこでいきなり大きいそろばんを出されて、伝票計算をしろ、というんです。伝票が、山のように積んであったな。ところが、そろばんがうまくできねえんですよ。夕方になってもいくらもかたづかない。やったふりして、少しずつ机の中にかくしておいて、あとで風呂敷につつんで家へ持って帰った。それから、家中総動員で計算して、次の日、すまして持ってきた。これじゃあしょうがねえ、ということ、山崎さんのそろばん教室に、しばらくお世話になったんです。

生子　私も試験で入った方です。試験には、数学と国語が出た。八月一二日に採用の辞令が出て、雇いを命じられて、三四〇円の月給でした。いまでもその時の成績物が倉庫にあるんですよ。

貫井　どのくらいの成績だったかな。

生子　まあ、あれなら置いても大丈夫、ぐらいの成績はとっていますよ。(笑)

松尾　わたしも二六年に試験で入りました。入ったころは、まわりを見るとどの人もこわい感じの人ばかりでした。

高水　あのころ、福生中学は臼井武一先生が教頭でした。中学校の最優秀な生徒を二人ばかり役場へ向けますからって推薦があった。あのとき、二〇人ぐらい受けて二人入ったんですよ。やっぱり優秀だったんだな。ちょうど松尾さんのころから、試験がむずかしくなってきたんです。

森田　地方自治法が、昭和二二年に公布されて、地方自治体の仕事が増加してきた。そこで職員数もそのころから多くなり、また優秀な人がふえてきたのです。

司会　話の様子が、どうも土地っ子ばかり入ってたんですね。

木村　わたしはちがっていました。杉並からのながれ者でしたよ。二八年に福生にきたんです。学生のころ夏休み中に役場にアルバイトにきたりしてたんですが、卒業と同時に試験を受けて入りました。三〇年でした。

貫井　私が総務課長になってから、これからはより優秀な人材を入れていかなければ、ということ、はつきり試験の成績順で採用していきました。

森田　幸造町長の時になって、簡易水道などで多忙になって人手が足りなくなりました。それまで、いわゆる新卒ばかり採用してきたが、その時代に、羽村の役場にいた島田猛さん、東秋留の役場

にいた桂川自範さんなどを、経験者としてきてもらいました。

執務ぶり

司会 当時の執務の状況をうかがいましょう。あのころ、女性は洗濯などさせられましたね。

木村 古い建物の時は、裏に井戸がありました。そこでシーツなど、タライいっぱい洗濯物を当番でしました。

高水 洗濯機はなかったんだねえ。

木村 洗濯板でしたよ。

司会 当直の枕カバーを洗ったり、ふとんを敷いておいたりしてくれましたようでしたね。

木村 トイレの掃除も女性の仕事でした。とにかく家でやらないことは、役場で全部やらされました。

司会 女性が掃除をしていたのは何年ごろまでですか。

上野 古い庁舎の時は全部やっていました。新しい庁舎になってからなくなったのでしょうか。

木村 古い建物は、床もつぎはぎだらけでした。そこを掃くのに、まず水をうってはじめてのですが、どうしても埃りがたちましてね。机の上なんか真っ白になってしまいうんです。

貴井 私なんかもやったものですよ。朝、真先にきて、机の上、男便所ときれいにしました。

それから、鉛筆をきれいにけずっておくんです。

司会 宿直はどのくらいまわってきたものですか。

貴井 月に三回はまわってきた。男性は一〇人ぐらいいなかったですからね。女性は土曜日の午後に、日直がありました。

森田 二二年ごろは、若い者といったら私と高水君しかいなかったの、たいてい当直はまかされてしまったものです。

司会 昼食はほとんど家へ帰って食べたでしょう。

高水 そうだった。弁当をもってきたのは、私と服部さん、森田君に斎藤さんぐらいだったかな。

貴井 あのころは役場へ入るとすぐに、湯呑とそろばんは自分のを用意させられた。

司会 私物ですか。

貴井 そうでしたよ。

生子 鉛筆はわりと使わなかったですね。ガラスペンを使ったでしょう。墨汁をつけて。

高水 あれがうまく書けなくてね。

生子 先輩、後輩の関係などは、厳格だったですね。

上野 厳格というより、礼儀正しかった、でしょう。

生子 帰る時にも、皆に「お先に失礼します。」と、ちゃんとあいさつしたものです。

森田 書類の扱い方なんか悪いと、どなりとばされてね。そのかわり、仕事はよく教えてくれたよ。

木村 上司を尊敬するという気持が強かったですね。

貫井 朝、出勤すると、お互いに「おはようございます」のあいさつを必ずかわした。

松尾 そういうことは、きちんとしてましたね。

木村 わたしは、戸籍の東やヨさんの下で仕事をしていましたが、トイレに立つ時もこわっていきました。いま思うとそこまでしなくてもよかったのかな、なんて思うこともありますけど。

森田 あのころは、上の人はとてもきびしかったけれど、全体に家族的なあたたかさがありませんたね。

高水 そうだ。だから仕事はきつかったけれど、もんくなんかだれも言わなかったですよ。

貫井 たしかに家族的でした。当時、暮れになってご用じまいというところ、宿直室でテーブルをならべて、一升の酒をみんなで呑んだ。ご用始めだって、みんなで牛鍋をつくって、それをつつきあった。

森田 ビールが少して、あとは宝焼酎を買ってきて、貫井さんが、きゅうりもみが得意でね、

それにキャベツをきざんだの。私なんか、町田さんへつくだ煮を買いにいかされて。柳山あたりへいって賑やかにやったものです。

司会 町長が、いつも役所に出るようになったのは。

貫井 岸さんが公選で当選してからですね。(二年四月)それまでは名誉職でしたから。

私が保存している記録の中で、職員数のうつり変わりがあるので参考にしてください。全部書くのも大変でしょうから五年ごとにしましょう。

二一・五(一五八) 二五・一(二六八) 三〇・一(五八八) 三五・一(八二八) 四〇・一(二二三)
四五・一(二五三八) 五〇・一(三九六八)

それに対して人口は(各年一月現在)

二五(二四六六九人) 三〇(二八一七三人) 三五(二〇六五七人) 四〇(二九一三三人) 四五(三七九四三人) 五〇(四五四一八人)である。

施設の面で

司会 むかしは暖房なんかどうしてましたか。

貫井 ダルマストーブが入ったのは、二五年の暮れでした。

森田 私はいつも寒がりだったので、冬には、火鉢を机の下に入れておいたんです。炭がよく

おこつてくると、そのうちに頭がズキズキ痛くなってくる。うっかりしていると、机のわくをこがしたりしました。そのあとになつて、設楽鉄工場から、小型のドラムかんをゆずってもらつて、薪をたいて使いました。

貫井 ダルマスストーブでも、石炭なんて使えなかつたです。古材を切つて使つたものです。それが途中で消えちゃうと、煙突がつまつているなんてその煙突をゆすつたりして、だからワイシヤツなんかは、すぐ真黒くよごれてしまいました。

司会 扇風機が使われたのは。

森田 新庁舎に変わる、ちょっと前ですよ。

松尾 たしかに、男の方は夏はステテコになつたり、ランニング姿であつたりでしたね。それで、うちわを片手に仕事なんて風景もありましたね。

高水 貫井さんもよく半ズボンをはいていたね。

貫井 そうだ、いちじ半ズボンはやつたですよ。

森田 印刷道具もいいものがなくてね。ガリ版だつてひどいものだった。書き損じると修正するのに、マツチをすつてこすつたりしたから、うっかりすると原紙に穴があいてしまつて。それから、印刷するにも課長だつてみんな自分で刷つたんです。

上野 新しい机や椅子は若い職員にはまわつてきませんでした。われわれの使つていたものに

は、福生村熊川村役場なんて書いてあつたものでしたよ。

木村 椅子も、アンコのとびだしたようなものを、おさえおさえして私たちは使っていましたね。

司会 印刷用の輪転機を二四万円で買入れたのが三八年二月のようです。同じ時期に、会計機が自動化されたり、電卓も買われています。

司会 職員が自家用車で通いだしたのはいつごろからですか。

上野 桂川さんが第一号で、わたしが第二号でした。昭和三七年からだつたでしょう。一〇万円で買ったボロなプリンスだったんですが、それへ乗ってきた初日に、当時の町長に見られて「そんなものの床の間へ飾っておけ。」なんて叱られましたよ。

司会 三七年では古い庁舎だつたでしょう。駐車場に困つたでしょう。

上野 当時は、どこへでも置けたですよ。

貫井 その少しまえに、マルウチつていうバイクがはやつたんです。公用でのバイクは、私が税務課長の時が使いはじめでした。そのバイクを役所が買ったので立川の試験場へ試験に行きました。

森田 庁用車の第一号は、警察の庁用車だった。自治警だったので、一緒に使わしてもらつたのです。国家警察になつてからは、イスズのトラックが入つただけけど、ボロで使うのに苦労

しました。三〇年ごろ、森田町長の時に、クライスラーの一九三八年型が入ったが、これもはじめの引取の時から調子が悪かった。あれは三〇万円ぐらいの車でしたね。

司会 そのころの三〇万は大金だったでしょう。よく役場で出せましたね。火災の時のサイレンはいつごろからですか。

上野 三〇年ごろでしょう。常備消防の時に、このサイレンで一騒動があったのですよ。消防団員の控所から宿直室へ、そのための合図のベルが引いてあった。ある時、そこへ詰めていた団員の一人が「サア帰るよ。」ということ、そのベルをおしたんだ。それが火災通知のベルとは知らずに。それで宿直室へ伝わってしまったので、宿直者はすぐに火災のサイレンを鳴らしてしまった。あとで上司からおこられましたね。

司会 ここで主な施設を設置年月順に記してみます。

二二・四（福生中学校開校） 二三・三（自治体福生町警察署設置・消防団結成） 二六・一〇（第三小学校開校・中学校移転） 二九・七（簡易水道各戸給水開始） 二九・一〇（上水道事業認可・工事着手） 三四・四（第四小学校独立） 三五・四（西多摩自治会館竣工） 三六・一〇（福生都市計画・街路計画・用途地域等都市計画決定） 三七・一〇（福生警察署現在地に移転） 三八・三（生活改善センター完成） 三九・一（役場庁舎新築完成） 三九・三（第一小学校新校舎完成） 同（熊川公園完成） 四〇・八（財政再建に地財法準用） 四一・四（第二中学校開校） 同（緑地公園誕生） 同（武道館できる） 四二・九（地財法準用解

除） 四三・七（町民プール完成） 四五・七（市制施行） 同（福祉会館完成） 四六・三（第三浄水場完成） 四六・四（第六小学校開校） 四八・一（牛浜チビッコ広場完成） 四八・四（市民体育館完成） 同（ほたる公園完成） 同（予防衛生センター完成） 四九・四（第七小学校・第三中学校開校）

外国人

司会 終戦から間もなく、外人が役場へ出入りするようになりましたね。

貫井 外人がくると、こちらはしゃべれなくて困って、終戦連絡事務所に山崎さんという人がいて、困った時はその人にきてもらった。あの事務所は井上時計屋さんのわきにあった。外人はだいたい税金関係できたんです。

生子 私が固定資産税の係りの時です。米人用のハウスがどんどん建つんです。係りになってから、英語がしゃべれなくてというんで、英語塾に通ったりしました。そのころその税金を「ハウスタックス」と言ったんですが、その発音がうまくなかったんですね。ハウスに行つてそれを言うと、向うが「私はタクシなんか頼まない。」というんです。それで、基地へ頼んで証明書をつくってもらつて、それをまず見せて、それから仕事をしました。それで仕事が進みました。

上野 外人といえは、売春取締条例が出ましたね。

主として親善のための会でした。

森田 日米親善のためということで、ボーリングやボクシングの大会が開かれて、それに職員がかり出されてね。

高水 おおぜい行かないと向うのごきげんが悪いので、職員は強制的に見物に行かされたものでした。

機構の変遷

司会 はじめの話で、古くは課長制度なんてなかったそうですが、それができたのはいつごろですか。

貫井 二五年ごろかと思います。榎健太氏が収入役から税務課長に変わった。内田勇氏が総務課長、服部収道氏が民生課長の三課になりました。

森田 二五年の一〇月一日の移動でこの発令になったものです。その時、職員数は二八名でした。

司会 つぎに、戦後の、福生町事務分享の状態をならべておきます。

二二・五

総務課（庶務・文書・会計・教育・渉外係）戸籍厚生課（戸籍・衛生・防疫・労政・復員係）



旧役場の正面にて（22年1月）
門柱前には英文の標識が見える。貫井氏蔵。

高水 あのところは、町全体が騒然としていましたね。いろんないきさつで町の中に赤線ができた。その浄化運動ということで、三輪車の荷台に、煉炭火鉢を入れ暖を取りながら、寒い夜をメガホンを持って歩きましたね。

上野 赤線というのは、一定の地域にくいを打ちましてね。そのくいの半分が赤になっている。その赤の範囲内は、特にバー、キャバレーを営業してもよいとした。それで、町の中にちらばっていたものを、あそこに集めたわけです。

木村 ときどき、米軍の司令官がきて、会議がありましたね。

貫井 あれは日米親善のため、各官公庁代表者が集まった会議です。会議というより、

財政経済課（税務・産業・調査・配給係）
二五・五

総務課・税務課・民生課と改正

二七・一〇

教員委員会事務局設置

二八・七（福生町事務分掌条例は廃止する）

総務課・税務課・民生課・産業課・建設課の五課となる。（水道係ができた）

三一・四

建設課を「土木課」と「水道課」に改める。

三五・八（議決）

「都市計画課」を設置する。

三八・五

総務課・財務課・税務課・住民課・民生課・産業課・土木課・水道課・都市計画課の九課となる。

四一・一

調査室を設けた。

四二・二

都市開発課に「開発係」を設置する。

四二・四

水道事業の設置……公営企業法の適用を受ける事業となる。

四三・一

水道課に「浄水場係」を設置する。

四八・五

水道課に「出納係」を設置する。

四三・七

企画調査室（職員・企画・広報・予算係）を設置する。

四五・五

民生課を次のように改める。

福祉課（福祉・保護係）衛生課（予防衛生・環境衛生係………注・市制施行年

四五・七

住民課→市民課に。産業課→経済課に改める。

福祉課を削る→福祉事務所となる。

四六・七

都市計画課の中に「福生駅東部開発係」を設置する。

四七・四

経済課の「と場係」を削る。……と場廃止。

都市計画課に「下水道係」を設置する。

四八・五

企画財政課・秘書職員課・環境保全課が設置される。総務課―庶務課に。建設課―土木課に改める。

四八・七

下水道課の中に「管理係」を設置する。

四八・一〇

建設課の中から「用地係」を削る。

新たに、用地課を設置する。

五〇・二

水道課に「給水係」を設置する。

五〇・四

環境保全課に「公害係」を設置する。

五〇・六

水道課を削り「水道事務所」を設置する。

四一・一

教育委員会教育課（庶務・学務・給食係）となる。

四五・五

教育委員会

庶務課（庶務・社会教育・給食係）学務課（学務・施設係）

四六・四

教育委員会学務課に指導係を設置する。

四七・四

教育委員会庶務課に「社会体育係」を設置する。

四八・五

教育委員会

庶務課・学務課・社会教育課の三課八係となる。

三四・六

議事事務局 書記 職員

四五・一

議事事務局（庶務・議事係）

四八・五

福祉事務所（庶務・福祉・保護担当・保育係）

四二・九

選挙管理委員会事務局 局長 係長 ー その他の職員。

四八・五

選挙管理委員会事務局（選挙係）

四六・七

監査委員事務局（監査係）

職員 厚生

司会 労働組合が始まったのはいつごろですか。

貫井 それは早かったですよ。労働組合じゃなくて、職員組合といったやつですよ。あれは、昭和二十三、四年からでしょう。そして、自治労へ入ったのが、二十六、七年ごろです。二年ば

かり入っていたが、会費が大変だからなどということをやめてしまいました。そのあとまた入ろうとしていたのがのびのびになって、今の石川町長の代になってから、入ったのです。

上野 このごろ公務員の給与が論議されていますが、私が二四年に役場に入った時、その月給が四七二七円でした。それ前までつめていた進駐軍での給料は一二〇〇〇円ぐらいでしたから、それにくらべてひどい待遇でした。

司会 その時代で、一般にはどのくらいだったんですか。

上野 八、九〇〇〇円ぐらいだったでしょう。

貫井 当初は、ボーナスもなかったしな。

高水 さきほどの話の、ソーメン手当が出たのは、いつごろですか。

貫井 二三年ごろから、生活補給金とか、臨時手当、あるいは越冬手当、一時手当など、いろいろな名目で出されていたようです。

昔は、役場につとめるということとは、名誉職的だったんですよ。生活のために、という人は少なかったんです。戦前のことですが、役場が大変で職員の給料を下げたことがあった。下げられた人の中で三人が退職した。その三人が「われら高給につき辞職する。」って宣言してやめたことがあったんです。

司会 ここで、市の決算額のうちりかわりを、記しておきましょう。

三〇年（八〇六四万円）三五年（一億七三八四万円）四〇年（八億四三六万円）四五年（一五億三七七九万円）五〇年（七〇億七四二五万円）

回想談

司会 何か、当時の苦勞談を披露してください。

森田 戦後の物資欠乏時代には、配給制度で役所の前に列をつくるが多かったですね。砂糖や衣類の切符の配給もありました。その配給のことで、建設現場などで、うれしい人口を出してくる。その調査に出かけてこわい思いをしました。

貫井 二一年で、この町の人口が一〇四六七人というのは、かなりゆうれいがいたのでしょう。配給物資を実際の人員よりよけいに受取るために、水増しで出してきた人数ですね。だから、転出証明書が高価で売買されました。

松尾 わたしは議会の議事録の清書のことで思い出があります。あの議事録の清書をするのに上司から紙がわりあてだったんです。書きそこなってもそのあと、用紙をくださいと言出しにくくて今のうちに、紙を自由にもつてきて使うことができなかったのです。失敗した時はもう悲しかったものです。二七、八年ごろだったでしょう。

上野 議事録を書くのは本当に大変だった。私の議会事務局長のころから、録音テープを使え

るようになったんです。

売春取締条例ができた時ですが、それに罰則があった。そのことで検察庁から問合せがあつて、その法の主旨をくわしく知りたいので議事録が見たい、と言ってきた。それが議事録をとつてなかったんです。“町長提案説明” “だれだれ、何々について” “右以上これこれ。これでは議事録にならないですよ”

司会 でも、昔の議事録がよく保存されていますね。

貫井 よく書きましたよ。

高水 六・三制の時（二二年）は町が大変だったんです。新校舎を建てるのに、いろんな面で苦勞がありました。次が赤線の問題でしょう。

貫井 税金の滞納整理に歩いて、自分の家に石を投げこまれた職員もいたんですよ。

森田 最近では電話が普及して、その電話を使って苦情めいたことがもちこまれるのは、その実情がつかみにくいだけに困っています。

貫井 むかしは選挙の時はこわかった。自分の選挙権が入っていなかった、ということでおこった人が日本刀をもってきて「責任者をぶったぎってやるぞ。」なんて追いかけまわされたこともありました。

また、年代についてははっきりしていないが、二十三年ごろと思う。行路病死人を福生病院に

迎えに行ったことがある。年末の忙しい時で、頼んでも人夫の人がきてくれない。やむなく職員三人で葬儀屋からガンバコを買ひリヤカーに積んで病院に行った。死体を引取り長徳寺の無縁仏の墓に運んだ。墓を掘るにも若い職員には手を出させず、年の数の多い私がしたが、前客の箱がまだシッカリしているので、その上に里ねて埋葬した。墓地が狭く、また木の根が四方にひろがっており、他に場所もなかったのだ、仏には申訳なかったがやむをえなかった。これが一二月三〇日のことで仕事おさめだった。

森田 これは個人の問題だが、あのころは役場が早く終わっても、そのまま家へ帰るのがいやでした。明かるいうちに帰ると、それから麦刈りやら、草むしりと手伝わせられるわけですよ。

高水 サマータイムなんていう時は、いかにして役所に残っていようと、苦心したものです。

貫井 独身者はそうだったろうが、こっちはもう、女房子どもをかかえて食えないものだから、日曜日なんかよく百姓やった。自宅の庭で、もち米を二斗もとったことがありますよ。それで餅をついて子どもに食わすことができた。

司会 広報紙の活動はいつごろからですか。

上野 私が議会の書記の時に、広報をはじめるということで木村さんと二人でやりましたね。

三年の九月に創刊号を出した。

木村 その号に、「今と昔」というタイトルで書けといわれて困りました。駅前の古い写真を借りて、図々しくも田村半十郎氏宅に話を聞きにいたりしました。

生子 それ以前にも、福生町報というものを出したことがありました。

司会 歴代の上司で、きびしかった人という。

高水 内田勇さんと貫井喜代次さんが筆頭でしょう。

森田 内田さんの時に、南新道の測量をやらされました。こっちは、測量なんてまるで知らなかったんですが、知らないなんて言えなかった。おかげでしかたなしに覚えちゃったね。

おわりに

司会 最近、女性の進出が各方面にめざましいですが、女性の課長さんはまだいないのですか。

高水 係長も、ここにいる松尾さんと木村さんに、影山愛子さん、保育園にあと二人と計五人だけです。今まではそれだけの経験者がいなかった、ということですよ。

司会 では、その女性係長さんに、市の職員としての生き甲斐を一言お願いします。

木村 やっぱり自分の仕事で、市民のためになっている、という意識の問題じゃないでしょう

か。市民のために、この私にどれほどのことができるか、ということですね。

司会 最近、優秀な若者が市の職員として皆さんのあとに続いています。幹部の皆さんも大変でしょうが、これからも一層がんばって、市民のためのよき市役所にしてください。(終)

昭和五十一年六月二十五日収録

記録 山崎茂男

わが家の戦後史

立川愛雄

私は明治四一年一月十二日、都下日野市の農家で、八人兄弟の五男坊として生まれた。

徴兵検査の結果、「甲種、第二補充兵役ニ編入ス」麻布聯隊区徴兵官から宣告されたのは、昭和三年のことである。大正の末からの深刻な不況と世相は、当時の若者にとってまことに、夢も希望もない、暗黒な時代であった。深刻な就職難の時代でもあり、その頃、愛唱された『馬賊の唄』の一節に、「僕もゆくから君もゆけ、せまい日本にゃ住みあいた……別れを惜しむ者もなし」という心境に似て、大陸ならぬ南の島台湾へ赴いたのが、昭和五年二二歳の春であった。

昭和五年八月、台湾総督府巡查を拝命、月俸三二円也となにがしかの手当を得た。十二月、高雄州勤務となる。台湾の地で妻帯、ほどなく、風雲急迫して、日支事変から大東亜戦争へと進展。(昭和十四年十二月十三日長男佳史死す。満三才。この年長女出生)

昭和十八年六月、臨時召集で「台南陸軍病院」へ応召入隊。当時、四歳の長女、二歳の次男、そして身ごもった妻を残して入隊を余儀なくされた。(恒春郡警察課勤務中を)

昭和二十年五月七日、ドイツ無条件降伏。日本の勝利も絶望的となった。五月十日、台湾軍は、現地召集の警察官全員を召集解除帰郷せしめた。敗戦の色濃い銃後の治安確保に充てるためだ。屏東警察署に配置された。

八月六日、広島に原爆投下。この日、二女京子死す。（生後一年六か月、空襲下の毎日だった）八日、ソ連、日本に宣戦布告。九日、長崎にも原爆投下される。十日、日本政府は、国体護持条件付で、ポツダム宣言受諾を連合国に要請。

八月十四日、ポツダム宣言受諾回答。

この日、蒋介石は、国民に対し、「暴を以て暴に報ゆるなかれ」と、日本国民に対する態度を放送したのであった。

八月十五日、日本無条件降伏。終戦の詔勅が、天皇陛下自らの玉音放送によって発せられ、ポツダム宣言の全面受諾と、その内容がわかるにつれ、台湾の日本人はたちまち、深刻な苦悶の中に突き落されてしまった。

その日私は、家族の疎開先に戻っていた。当時、屏東警察署に勤務して別居中だった。

部落に唯一一人の駐在所の高橋夫人が、泣きながら飛んできた。郡役所へ「非常召集」で参庁している主人から「敗けたんだ……」と電話があったと、泣きくずれた。戦時下とはいえ、二女の死などで傷心の私たちも、思わずぼうぜんとして声もなかった。

引き揚げ

そしてあの歴史的な八月十五日から二か月の間、全台湾はデマと無秩序の混乱の中で、復員軍人の街頭氾濫と、物価騰貴の現実面を見るのみであった。しかし幸いにも、台湾人の自覚と、日本官憲の余力は、無政府状態というような徹底的混乱をきたすこともなく、経済的にもさしたる混乱にも陥らず、とにもかくにも総督府の情力を借りて、中国側の接收（進駐）に備えたのであった。不安と、焦躁と、屈辱の日がつづき、十月二十四日、陳儀長官の着任、全面的接收（占領）が行われ島内は、『台湾光復』の歓声に沸き立つ反面、『侵略的日本人の帰国』『在台日本人四十万帰国配船』の話題、台湾居住の問題等について、揣摩臆測（さくさく）に基づくデマが横行した。

十二月九日、『台湾新世報』の日曜評論に「大公報」の李純青氏（台湾人）は、

「日本人に与ふ」と題して、中・日の問題を論じ、

「日本人が翻然として悟るところがあり、衷心から民主への道を歩み、自由と平和を愛好し、進歩的世界主義に奮闘し、圧迫なき、搾取なき理想的国家を建設することが出来るならば、日本民族は偉大で、日本本土は麗はしきものであると私は信ずる。

かくして万人の憎しみから、万人の敬愛に変れば、海は広く、空は高くして、到るところ可ならざるはなきに至るのである。これが、私の結論であり、私の熱望でもあるのだ。」

父祖以来、永住の地としてきた今、名のみの故郷には、待つ人も、頼るべき人もないと嘆く人々もある。ただ、その日を送り、明日を生きるための食糧を求めるために、私たちは、農地を借りて俄百姓に精を出したり、物々交換で食糧品などを買集めた。「日本人に米を売るな」などのデマが流れ、食糧確保がきわめて重要な仕事であった。路傍で物売りの日本人の姿が目立つた。

戦い敗れて、母国の消息とて知るすべもない私たちには、ただ不安と焦躁の日々が続いた。許されて帰国できる日はいつか？

敗戦直後の日本は、二五〇万の家屋破壊と、八〇〇万人の地方疎開者、荒廃した都市には、家なく、食なく、数千の浮浪児がさまよっていたという。そこに、海外同胞六六〇万人の引揚者と復員兵が帰ってくるのだ。軍隊のような組織をもたない一般邦人は、敗戦国の無力さ、惨めさを背負った逃避行だったといえる。

応召から除隊して、屏東警察署勤務となっていた私は、同僚たちと、台湾省屏東市政府に徴用されて引続き警察事務に従事することになったのだが、台湾はすでに中国の地であり、外国であり、日本人は在留を許してもらっているに過ぎず、「日僑」と呼ばれ、「征用日籍員警」という仮の掛にすぎなかった。しかし、日・支事変勃発以後に来台した者は、一律に侵略者なりとして解職されることになる。

敗戦によるあらゆる悪条件の下に、三〇〇万の軍隊は、比較的、組織的に帰還したとはいえるのだが、しかし、海外を永住の地としていた三〇〇余万の一般邦人は、父祖の代からの資産をあとに残し、ほとんど身一つで帰って来たのであった。

対日理事会議長・連合軍最高司令官外交顧問ジョージ・アチenson氏が行った声明に、

「日本将兵の送還は、ポツダム宣言の条項にしたがって行なわれたものであるが、一般日本人の送還は、全く人道上の理由によってなされたもので、総司令官の義務として行なったものではない。」(二十一年九月七日)と述べられている。



外泊許可を得て、家族と記念撮影(昭19年秋)
(妻清子・二女京子・長女雅江・二男光史)

於 恒春郡警察官舎

と、きわめて大局的に論説し、日本人の真の自覚と反省を促がしたのだった。

終戦のとき、海外にいた日本人の数は六六〇万人。そのうち、旧日本植民地だった台湾・朝鮮・南洋委任統治領、さらに、アメリカ・イギリス・オランダ地区からの引揚は、昭和二十二年(一九四七)十二月までにほとんど完了した。軍隊が三〇〇万、一般邦人三〇〇余万であったという。

徴用された人たちには、月手当はあったが、日に日にインフレが激しくなっていた。

昭和二年二月十五日、「台湾省日僑遣送応行注意（引揚規則）」が発表された。

第一条 本省日僑ノ遣送又ハ留台ハ其ノ志願ニ依ルモノト、本省ノ必要ニ依テ之ヲ決定ス：「甲）日僑留台ヲ志願スルモ政府其ノ留台ノ必要ヲ認メザルモノニ対シテハ速ニ之ヲ遣送スヘシ
第三条 遣送帰国ノ日僑ノ携行荷物ハ、一人一担トシ、自ラ運搬シ得ルモノニ限ル……」

さらに、二月十六日、行政長官陳 儀名をもって、「日僑私有財産処理弁法」が公布される。

「不動産は一切接収。各人携帶現金は壹千円以下とす。」

私たち徴用員に対しては、二月二十八日付をもって、

「三月二日限解任スルニ付、引揚帰国ノ準備セヨ」

との指令がでた。（台湾全島の引揚は、三月第四週中に終了すべし、との布告であった）

台湾や、南朝鮮の一般日本人が、米軍政の輸送計画により、おおむね順調に引揚をおえたことは、幸運な部類といえる。

これに反して、北朝鮮から、満州（大陸）地区からの引揚は悲劇であった。

あの三十八度線を突破しての脱出行は、名著『流れる星は生きている』（藤原てい）にも、まだまだ書きつくされない悲惨な物語を秘めているといわれる。

台湾においては、蒋介石総統の指導精神が、政府幹部に浸透していた。陳 儀長官は、去る十

月二十五日の「台湾光復慶祝大会」の訓示に、

「……しかして、我が一般官民・軍人は、日本人に対して、日本の戦争犯罪人及び不法なる奸徒で、我政府が法によって嚴罰を加えるのを除く以外、我々は、当然蔣委員長の、『不以怨報怨而樂与為善（怨を以て怨に報いず、共に善を為すを樂しみと為す）』との大方針を体すべきである……」と述べられた。

しかし、個人的には、いろいろと、私怨や、憎しみからの迫害もあった。いやがらせや、謝罪を要求されるのだが、最後は、金銭や家財などで解決した。戦争が激しくなると、食糧の増産・供出などを担当した者、皇民化運動としての寺廟整理の第一線で働いた人びとへは、執拗なまでに報復的ないやがらせをうけたのも、むりからぬことであった。

特高警察に従事した人たちへの報復は、台湾人の職員たりとても容赦なく制裁（暴行）をうけるのであった。

引揚は、第一次は軍人遺家族・留守家族など、第二次は一般市民、私たち徴用員などは最後として、三月二三日、高雄港に集結するよう指示される。あわただしい帰国手続（準備）が始まる。

三月十日、「健康検査第一次登記」で、チフス・コレラ・種痘の接種・マラリアの採血検査や、検便が行われる。第二次検査は、高雄港で行われる。

三月十五日、市政府に出頭「私人財産清冊（目録）」を提出、照合の上、接收人と監収人の証印

を受ける。疎開の際、大部分の家財は、旧任地の恒春街に残し空襲で失い、^{おけい}新生活を続けた現在、わずかばかりの家具と、最後まで残した、報国貯蓄債券数十枚のみを所有したにすぎなかった。これを書き上げる。

戸税・水道料・電気料などの公共料金の「完納証」を受ける。私的の借金など許さるべくもなく、あますところなく徴収されてしまっている。

三月二日、市政府から、「台湾省回国日僑証明書」の交付を受ける。家族は妻・長女・二男。輸送隊の編成は、「屏東市第三大隊・第二小隊・第五班」携帯品は、「個人携行物品明細書—各人別—」により、行李五・布団袋二・トランク一・背負袋四と記入された。

三月二三日、私たちは、屏東市の黒金小学校々庭へ集合する。そこまでは自ら荷物を運ぶのだ。台湾人の友だちが協力してくれて無事搬入できる。官舎の門を出て、思わず振り返って見ると、残した家財を物色する人たちが群がっている。

屏東市内第三次、最後の引揚部隊五〇〇余名が集合した。市政府・製糖会社などに徴用されて残留の日本人とその家族の方々数十名の見送りを受け、列車で高雄に向う。

荷物のうち、行李・布団袋等は託送扱として、この日までと自ら志願して残留してくれた、若い兵隊さんたちの奉仕によって、市政府の好意によるトラックで高雄港まで送り届けてくれるのであった。

かつての同僚・友人・役所の給仕などが、子供たちへと心づくしの贈りものを持って駅まで来てくれ、別れを惜んでくれる。

領台以来六十年。さすがにこの日、去る者、送る者、ともに惜別の情禁じ得ぬものを覚えた。道行く市民もただ声なく互に手を振りあうのみ。

終戦以来禁足ゆえ、久しぶりの高雄だが、駅からは岸壁の大倉庫へ直行。アンペラ（むしろ）の上での船待。中国兵に監視された四日間であった。

昭和二十一年三月二六日、岸壁広場で荷物検査。各人毎に、全荷物を開ける。思い出の写真の数々と、日の丸の旗とを砂中に埋めたことなど、アルバムをくぐるごとに、当時のことが偲ばれる。最低限の生活必需品以外は認められないのだが、枕二箇の許可は、民情の相違からか、現在でも不思議に思えてならない。

身重な妻と、幼児のことゆえ、四人分の荷造りを手早く済ませねばならぬ。託送扱が許され、行李五・布団袋二は、これより運送会社に委託されるのであるが、一人で持てるだけの荷物と、一人につき千円の現金、これが許された財産の限度であった。乗船開始の合図に、子供といえども自分の体重ほどもある荷物を背負わされた。

満四歳の光史のリュックには、亡き兄佳史と、空襲下の八月六日疎開地で死んだ妹京子との遺骨、絵本何冊かが入っている。六歳の雅江も、歯をくいしばってタラップを登っていくのだっ

た。

米軍貸与のリバティ艦、一万トンはない引揚船は高雄港を出帆。さらば台湾よ、船底に荷物と共にすしづめの有様で別れを惜しむすべもない。

船は南端バシー海峡をこえて、台湾の東海岸沿いに北に向う。この頃、ようやく上甲板に出たが、もう夕闇に包まれて島影もさだかではない。

乗組員はみな日本人で暖かく迎えてくれる。せっかくここまで一緒にきたのに、故国の土をふまずに、船内で逝った人もある。帰らぬ人となった方の遺体は、毛布にくるんで海中に降ろされた。

四月一日、広島県大竹港外に到着。六日上陸。大竹引揚援護局は、旧海兵団跡に設立されたのである。幼い雅江は「ここでは検査はないの」と、いぶかしげに問う。母国の実感とてないのだ。

防疫のためのDDT消毒・健康診断と検疫作業がくりかえされる。郷里の兄に帰国の旨を知らす。九日夕、引揚・復員者の臨時列車で東京へ。十日早晩、品川駅に到着。ホームから見える焦土東京の姿には、たまらなく泣けてくる。そして、駅頭で始めて接した「在外同胞救出同盟」の若い学徒たち。聞けば彼らは、いづれも、外地からいまだに還らぬ骨肉（はらから）をもつ人たちだという。あの献身、あの奉仕。私たち引揚者のだれもが、終生忘れ得ぬことであろう。名も

知らぬ君たちの倅を念じ、再会を希うものはひとり私だけではあるまい。

東京駅から中央線へ。なつかしい故郷の日野駅に着いたのは朝八時頃である。ここまで来ると、さすがに異様な風態の引揚者は私たち四人だけであった。いぶかしげに見つめる通勤の人たち。

十余年ぶりに見る故郷の駅。十年ぶりの妻さえも、移転した新駅舎に、ただ呆然とするばかりであった。胸に縫い付けた白布片は、迷子札ならぬ、祖国日本までの行先宛名札である。

たまたま買い出しにと駅に来た義妹は、やつれ、変りはてた姉の名札を確めるようにのぞきながら、妻に向って「姉さん？」と呼びかけてきたのであった。

この日は、第二回総選挙の投票日であった。駅前の道に投票に赴く人々がつづいている。顔見知りの者が見えた。しばらくして、伝言をうけた長兄がリヤカーを持って迎えに来てくれる。始めて見る伯父の車に乗せられた子供を囲みながら生家へ向う。広い農家の一間に落ちつくことになる。

翌十一日、何はともあれ長女を伴って、母校へ入学手続にゆく。教科書とてもない。

南国育ちの子供たちにとっては、四月とはいえ寒さがこたえるらしい。友だちとてもまだなく、三キロ程の田舎道の通学は、さぞかし淋しく辛かったことであつたらう。

九月、三女きくえが生れる。農村とはいえ端境期では、乏しい配給米以外はなかなか手に入ら

ぬ。ただだ、母子とも健やかであれかしと祈るばかりであった。

海軍予科練から復員した甥とともに、馴れぬ農作業を手伝う。田植・麦刈と忙しくなる。

農閑期に入って、駐留軍の警備員・知り合い先の物産会社の手伝などをつづけるが、休日・非番の日は、畑仕事もつづけなければならない。せめて子供たちのために、乏しい食卓を賑わしてやりたかったからだった。

小学校時代からの友人が、国鉄に就職を世話してくれる。さもしいうだが、生活苦の身には、買い出し用の「無賃パス」が魅力だった。その頃やはり友人から、町の農地委員会へ推せんしてくれた話もあったし、自分では警視庁へ「履歴書」を出してはいたのだった。

昭和二二年四月、東京鉄道管理局総務部文書課に勤務することになった。実は、東鉄局の警備員である。前年の五月三一日付で、台湾総督府関係は退職となる。(普通恩給年額四一七円をうく) このころ、常夏の島から引揚て各地に散って行った友人からの消息が交々に来るようになった。

そのころ私の作品に次のようなものがある。

還りても 帰農かなわず土地なしと 農地制度の頑に哭く。

雪つもる 北海の涯にはるばると 開拓にはせし 友もありけり。

四月十二日 積雪二尺 春遠しと 開拓に行きし 友のおとずれ。

子は知らず 遅配に悩む買出しの リュック姿の 父を怪しむ。

子は知らず 乏しき中に にかくも 生きむとなやむ 父と母とを。

“ふつさつ子”二十年

昭和二三年の春。台湾で唯一人(多摩っ子)の隣人斉藤博氏が一つの朗報をもたらしてくれる。無理を承知で、おすすめに甘えて、福生に、六坪半のバラックを建て(九月のアイオン台風で倒壊してしまったが再建)九月二八日、わずかばかりの家財を甥の牛車にのせて(といっても半分は当時としては貴重な燃料用の薪である)引越して来た。せまいながらも楽しいわが家である。

農地法による地目変更(住宅地に転用の)これは大変なことで、実家の畑でもままならなかった。孟母三遷の故事もあるが、子供のための教育環境などといっておれなかった。“福生っ子”として落ちついたのはよほど後のことであつた。

雅江三年・光史一年、日野第一小学校から、福生第一小学校へ転校。

福生町大字福生字志茂三〇七番地、畑七畝二五歩の内四九坪の土地使用承諾願(地主田村和一、耕作者田村治一郎、離作料坪当り四十円)が、二三年七月二四日受理され、同日福生町農地委員会承認された。(八王子市の戦災者用の材料を五千円で求め、釘・ガラスが配給された)

借地権利金二、五〇〇円、地代は坪当り月一円六〇銭。ただし初年度は半額とする。これが昭和五一年度は、坪当り月七二円となっている。

しかし、福生駅と牛浜駅の中間、桑畑の中に点在するバラック。新開地の名のとおり舗装した道もなく、電灯すらなかった。町役場から特別配給の石油をともした豆ランプの生活。もちろん当時は、ガス特にプロパンガスなどはない。水道もなく、井戸を掘る力もない私たちは、玉川上水沿いの萱戸部落の農家からの貰い水だった。町内には銭湯もなくて週一遍位、立川まで銭湯に行くのが子供たちの楽しみの一つでもあった。

牛浜駅のホームから、桑の葉越しに見えるわが家。清岩院の森をバックに、町役場の二階建が異彩をはなっているような有様で、外灯などはもちろんなかった。

この頃の志茂部落は、『志茂睦会』と称して、隣組八、約一〇〇戸余と、航空寮(家族寮)五二戸とで昭和二十二年十二月に結成されていた。

終戦までは二十数戸が、配給制度や、隣保班制の都合もあって、萱戸部落と合併していた。

戦後、基地要員や、建設関係者の転入などでしだいに人口も増えてきた。ところが

二二年五月、政令一五号で、町内会や、部落会・隣組の制度は解散を指令されたので、磯村武夫・溝口安一氏等の主唱により、『睦会』を結成したという。

昭和十四年、福生の武蔵野地区に、日本空軍の飛行場が設置されてから、様相が一変した。翌

十五年十一月には福生村・熊川村が合併して町制を施行、軍都として発展してゆくのである。

ここに、福生村の昔の人口統計があるので、その変遷をたどってみよう。

寛政十一年(一七九八) 二二二軒 八三一人(福生村方様子銘細書上帳)

明治二十年(一八八七) 二八六軒 一、四九四人(福生村々誌稿)

福生村八九年間に、五四戸、六六三人の増。一年平均〇・五戸、約八人の増である。

さらに大正以降は次の変遷がみとめられる。(福生村・熊川村合計したもの)

大正 九年	八一八戸	五、〇三一人	男 二、三二五人	女 二、七〇六人(国勢調査)
〃 一四年	九七八戸	五、九〇七人	男 二、八〇四人	女 三、一〇三人(〃)
昭和 五年 一、〇二四戸	六、〇〇五人	男 二、九六九人	女 三、〇三六人(〃)	
〃 一〇年 一、〇七九戸	六、三七〇人	男 三、一四三人	女 三、二二七人(〃)	
〃 一五年 一、二八〇戸	七、九二一人	男 四、二〇八人	女 三、七一三人(〃)	
〃 一九年 一、九一一戸	九、五七五人	男 四、八〇八人	女 四、七六七人(人口調査)	
〃 二二年 二、三〇〇戸	一四、〇六六人	男 八、〇三七人	女 六、〇二九人(臨時調査)	
〃 二五年 三、二一〇戸	一四、六六九人	男 七、四二二人	女 七、二四七人(国勢調査)	
〃 三〇年 四、一三七戸	一九、〇九六人	男 九、六九八人	女 九、三九八人(〃)	
〃 三五年 五、五六二戸	二二、九九八人	男 一〇、五二六人	女 一二、四七二人(〃)	

昭和十四年、陸軍飛行場（今の横田基地）設置のため、建設要員の流入と、軍施設要員などの転入がめだち、さらに敗戦後、米軍基地として接収され再出発し、その後、基地は追加接収拡張を繰返した。二五年、朝鮮動乱の勃発など、つまり福生町は外的な要因のために飛躍的な人口増をもたらし、さらに増加の道をたどっているわけである。

このようなしだいで、新開地へもだんだん転入者が増してきた。復員・疎開・引揚などの人びとが集まった。とくに、昭和二三年春、農地法で一般農地の転用には厳しい規制があるのに、福生町の本町・志茂・牛浜地区などの畑地に対して、都市計画に基づく区画整理に着手するとともに、関係地主たちによって積極的に、宅地開放を呼びかけたのであった。

昭和二十四年二月一日、志茂睦会会員一七〇、町内会費月額十円を二十円に値上げをする。

福生町整理地区電灯消費組合（船木甚平組合長）の同志一一七名、八か月余にわたる努力がみのり、点灯祝賀報告会が、三月二十七日、中学校（現三小）で行われる。建設費六六万円、一世帯貳千円宛の負担ということで、当時としては涙ぐましい限りで、不足分は、学校其他公営施設関係から町その他の助成金によった。（現在の志茂第二町会Ⅱ三・四区地域と、牛浜部落一帯である）

六月十一日。志茂・牛浜地区一七万七、八八八坪の区画整理が完了して、「土地の名称、大字福生を本町・志茂・牛浜に分割変更する」という公示がでて、わが家も、大字福生三〇七番地

が、福生町志茂五一番地と変る。八月、福生そろばん塾が、現在地で授業開始。

昭和二五年四月から、志茂第二町会と改める。（町条例による）町内を、一・二・三区と、若葉荘（旧航空寮）地区とに分け、正・副区長制を設ける。会員数一八八。

転入者が多くなるにつれて、電圧が低下する。これが改善促進運動を展開、七月要求貫徹。街づくりの一方として、夏の子供まつりを盛り上げようと、太太鼓（尺六・台付五千円）を求める。二四・二五年度にわたって、町内の勤労奉仕によって、各所に防火用の水槽を築造する。材料のみを現物支給されてともかく完成した。納税組合の結成。十一月には、「銀座通り商店連盟」が結成され発足。この年八月、私は「鉄道公安職員」に転じ、鉄道警察R・Pの仕事に従事。

昭和二六年。町会費月額三〇円に、会員数三〇〇。三月、地元負担で銀座通りを舗装して面目一新する。防犯灯を兼ねた外燈がわづかながらともの。四月、町長・町議選が行われて、加藤市蔵町長、中野七五郎・船木甚平両町議選出。この年から、福生名物「七夕まつり」が始まった。

八月。部落のこどもたちを引率して、千葉の幕張海岸での海水浴。松永栄氏の企画で、こども会の恒例行事となる。十月一日、志茂・中福生・原ヶ谷戸・牛浜部落の児童四五一名が、第一小学校から独立して、福生第三小学校が開校。初代校長は広瀬義雄先生で、十一月二日、現校舎に

移る。PTAが結成される。初代会長に、村野喜平氏が就任された。

街づくりのための「部落公民館及児童遊園地」建設が企画される。清水寛二氏所有地一五〇坪（志茂一八一）を借用、雑作料坪当り六〇〇円計九万円。町内の一四七戸が快く募金に応じられて、一七万八、四〇〇円が集まる。二七年七月、待望の「志茂睦会館」（木造瓦葺、平家建一三、五坪、工費五万四、〇三円）と、「児童遊園地」（ブランコ・鉄棒等）が完成。喜びつどう子供たちを見るとき、わが町の実感がしみじみと湧き起るのであった。

この年をはじめ私は、PTA委員に推されて、各行事に参加見聞して、基地の町の実態と、そのみじめさを痛感した。PTAの使命は、先生と、父母が、平等の立場で、子供のしあわせの問題を研究し実践するのだ。というが、これでよいものでしょうか？と、私は皆さんに訴えた。

「私達の可愛い子供たちを取巻く社会は、決して善いとは言えない。子供らは汚れない眼で自分の周囲を眺めて、何を考えていることだろう。六月の父兄会でこのことが話題となったところ、『心配はいらない。案外無関心だ！。異った社会の人達だ！。そんな風に考えているらしい。』と。一葉の「たけくらべ」の中の子供たち。あんな風にならぬかしら。これは私だけの杞憂かしら？、総ての子供たちが健康に、心美しく、幸せになる日はまだ遠いかも知れない。だが総ての親の願いは皆同じではなからうか。真剣に考えよう。」（二七年、三小PTA会報）

七月。加藤町長が辞任して、森田幸造氏が選出される。

基地依存、繁栄の裏には、「夜の女」がある。この小さな町に、千三百人ものいかがわしい女がいるという。横須賀市が二五万人の人口に、四千の「夜の女」に対して、わが福生は一万六千の人口なのだから、そのひどさが想像されよう。

学校が二つ、総戸数百軒という静かな「牛浜部落」に、夜の女の置屋が、半数近く四十軒もできたのでは、青少年の教育に悪影響を及ぼすと、部落の有志が立上り「浄化運動」に乗り出して、PTA・学校その他の諸団体にも呼びかけて署名運動を行い、「請願書」を八月八日、町長、警察署長に提出するに至った。

九月一日。ついに、オフ・リミット。つまり米軍の立入禁止令が出され、十月四日に「赤線地区」なるものが設定された。

福生町ではかねてから、「浄化標語」を募集中で、応募三百点の内から次のものを発表した。

一席 明るい環境、住みよい福生。

山崎 信一

二席 ヤミの花、咲かすな町が暗くなる。

佐野 芳子

三席 清らかな、町に明るい子供が育ち。

松平ナミ子

「基地の子どもを護ろう」という声が全国的に挙がったのは、翌二八年のことである。

昭和二八年七月。米国独立記念日の際、横田基地婦人会その他の資金で、全国にただ一つの「混血児収容所 福生ホーム」が設立される。(三一年九月閉鎖)これらは決して他人事ではない。

町議会でも、トラックに、「教育環境を守るため、夜の女の一掃」と書いたまん幕を張って、マイクを持って町中を走り町民に訴えた。九月十日、米軍は第二次立入禁止令(無期限)を通告実施。十一月五日、「風紀取締条例」(福生町条例第十号)を公布、即日施行。これは、全国にも例のない画期的なもので、「売春防止法」の制定は、昭和三十一年、全面施行は、三四年四月一日だった。

浄化運動の展開に伴って、子供たちを悪環境から守ろうと、父母の関心はたかまってゆくのである。第三小PTA三〇〇名は、二〇万円余を集め、シーソー・ブランコ・ジャングルジムその他の体育用具を整備するための指定寄附を行った。新設校ゆえ諸施設は不備だらけである。

子供たちの校外指導には、各部落とも真剣に考え協力を惜しまなかった。部落子供会の育成、夏休みの海水浴、山遊び、ラジオ体操の会、紙芝居のつどいなど、親子ぐるみの行事を企画した。

わが家でもこの年、末娘が入学、兄は六年、姉は中学二年、ただすこやかに明るくと祈るのみ。

昭和二九年四月、志茂町内の第三区を分けて、第四区を設け、若葉荘を第五区とする。

五月二三日、牛浜の高台に、「忠霊塔」(二五七柱合祀)が建立された。

累次の戦役には数多尊い生命が国に捧げられ、わが郷土においても、出て帰らぬ殉国の士は、実に三百有余におよぶのであった。

七月、簡易水道が各戸に給水開始。夏祭りには遊園地で、子供角力大会が催される。十一月、念願の「志茂子供みこし」(宮本製の尺五、十五万三、五〇〇円)を求めて、入魂式を行う。

昭和三十年四月、「志茂第二町会規約、同施行規則」ができる。みこしの安置所(土蔵造、七坪)もできる。並木秀氏が推されて町議当選。この頃、ハウスの汚水問題(井戸水汚染)が起り、上水道の普及促進運動が活発に叫ばれる。九月から第三小学校完全給食を開始する。町制施行十五周年。

昭和三十一年五月、睦会館に水道を布設する。秋山誠一氏が町長に選任される。

九月、日米合同委員会で、横田基地拡張を決定、買収、借上合せて、十四万八、七三三坪。

昭和三十三年三月、福生第三小学校創立五周年を記念して校歌ができる。(館盛光校長作詞)

十一月二六日、小河内ダムが完成。発展する大東京市民のために、墳墓の地を湖底に沈めて離村された、六四九戸、凡そ四千人の方々の感慨はいかばかりであろう。福生に移られた方も多い。

昭和十六年。山下久吉（坂本部落）河村忠文（南部落）の両家が、志茂部落に來られる。当時の志茂部落は、見渡すかぎり桑畑の中を名ばかりの一筋の道（今の銀座通り）これに沿って、沼製パン所（現並木秀氏宅）と、市川内蔵氏外軍要員宿舍四戸と、栢植源氏のみであったという。

つづいて、佐藤武一家、原島保家が、小河内から來られたのであった。

河村・山下・栢植氏は昭和十九年、いずれも家族を残して応召入隊されるのだが、河村氏のみは護国の鬼となって遂に戻らず、比島マニラ市にて戦死されたのであった。

憲法第廿九条私有財産権擁護の立場から政府は、引揚者を少くとも、戦災者なみに扱ってほしいというのが全国数百万引揚者の叫びであったが、これにたいし、法理論上、引揚者の在外財産補償の義務はないとの解釈をとっていた政府も、声なき声にこたえて、「引揚者給付金等支給法」（法律第百九号）が制定施行され、三三年三月、わが家にも四名分で、五万四、〇〇〇円の国債を交付される。長女は高校を卒業就職。弟は高校二年、妹は小学校六年生。私は四月、中野駅勤務となる。七月、多摩地区の歴史と民俗調査が実施され私は、第十三区（福生町）の調査を担当。

八月、睦会館を新築（木骨鉄網モルタル塗、平家建、五一、二五坪）工事費一六五万六、六五一円は全会員の献出による。九月、福生育英会が、橋本兵五郎先生はじめ、町民の浄財で創設発足。

昭和三四年四月。皇太子明仁、正田美智子さんと御結婚という、明るい話題に心なごむ。

町議選には、山下久吉・高橋千春両氏当選。十二月、安野休一氏、民生・児童委員に任命さる。

昭和三五年、町長に、瀬古清蔵氏選任。十月、町制二十周年、町章制定、『福生町誌』の刊行。

昭和三六年十月、青梅線が東青梅駅まで複線化して、牛浜駅は橋上改札駅に改築される。

十一月五日、福生第三小学校創立十周年記念の式典が行われ、協賛会によって、鼓笛隊楽器購入、校庭の緑化整備、教育用テレビ設備（翌年二月完成）などが贈られる。発展する基地の町のかげには、好ましくない教育環境がある。PTAとは、本来父母と教師が協力して、教育の効果をあげるように、各学校単位が自主的に結成・運営する民主的教育団体であるべきなのであるが、まず、施設・環境の整備、教員の研究費補助など、物的施設の整備が先決されなければならなかった。植樹・運動用具・スツール・給食調理機・視聴覚教育設備などで、PTA活動の展開を期待しての教育費の私費負担が解消されるのは、昭和四二年三月（知事通達）のことであった。

三小開校十周年に際し、松永栄・川田雅章・森田芳松氏とともに私は、「特別功労者」としてはれの表彰をうけた。

十二月、福生町老人クラブ「福寿会」が結成され、志茂部落にも支部(約四〇名)ができる。

昭和三十七年四月、睦会館に都市ガスを敷設。六月、福生町青少年問題協議会(青少協)が発足。

昭和三十八年三月、町内第五区は解消する。四月、町議選には、高橋千春氏のみ出馬し再選。

この年はわが家も多事、元旦早暁、長兄松雄死去。三月、私は、国鉄を定年退職(五五歳)。長女雅江の婚約。四月二八日、中村 実と結婚。六月、私は退職を機会に念願の北海道旅行。鈴蘭と桜とライラックの花盛りである。台湾から引揚げて開拓に赴いた磯田さんの農場を訪ねる。逞ましい友の一家の開拓苦心談、積る話に夜の更けるのを忘れて語り明かした。

昭和三十九年一月、町役場庁舎が新築される。この月、かつては福生の文化的殿堂でもあった、映画館のニュー福生・テアトル福生が閉館する。五月、石川常太郎氏町長に選任される。東京五輪大会の年。十月八日、オリンピック聖火リレーが瓜生君ら若人の手で、青梅市・羽村町から引継いで昭島市に向う。

わが家も、三月初孫浩誕生。光史卒業(東京外語大) 日本交通公社に就職する。私も、一年間の東京鉄道管理局旅客課へのパートを辞めて、五月から福生町役場水道課へ準職員として勤務することになる。(水道課業務係の仕事は現在も身分こそ違え続けて居る。健康なればこそか?)

昭和四十年四月、同好の士を集めて、「福生町文化財調査会」が結成されて私も参加する。(ふっさつ子第二集参照) 清水寛二氏が会長として、「町内の文化財に関することを調査研究し、資料を集め、また町民に、文化財を愛護するよう啓蒙する」ことを目的としたもので、清水会長逝去後は、森田潤三氏を後任に推挙し現在に至った。

七月、志茂町内有志の技術奉仕で「舞台」(軽量鉄骨組立式・四坪)ができて、盆踊りに、七夕に、夏祭りに踊りの輪で賑う。「睦民踊会」が生まれる。

町財政は悪化して八月、地財法の準用をうける。

昭和四〇年 八、六二五戸 三〇、七九〇人 男一四、七八八人 女一六、〇〇二人(国勢調査)

昭和四一年四月から、町会費月五〇円に改める。会員数四〇五。(入会金の制度を廃止する)

第三小学校に、福生町給食センターができる。六月、福生町社会福祉協議会が創立される。

七月、七夕祭りに踊りをと、「福生音頭」ができ都はるみ・杉良太郎が歌い、振付もできた。

昭和四二年二月、陸会館管理入室を改造する。四月、町議選、高橋千春（三選）、末次性男兩氏當選。八月、「志茂二陸囃子会」が結成。青少年輔導の一助にと、町内有志で、お囃子道具一式を寄贈。

九月、福生町は地財法の準用が解除されて、これより健全財政の軌道にのることになった。

「第三小学校鉄筋校舍整備協賛会」の諸事業が完成された。四〇年十二月の設立趣意書によると、

「この度、国家の基地周辺公共施設の防音化方針に基づき、本校も国家予算による防音鉄筋校舍への改築工事が始められました。（中略）第一・第二小学校の実情を伺いますと、国家の財源で補償されるものは、今までの校舎に対してだけで、その他は一切町費負担であり、町の現状（財政再建団体）は、一応やむを得ない施設、教材・教具を辛うじて充足するに過ぎないと事であります。（中略）何とか皆様の御協力を得て、町内の他の学校なみの教育環境を用意してあげたいとお願い云々」

これには、学区内全世帯もれなく参加され、一、六三七名その他の協力に依り、実に三五三万五、五九一円の資金（当初目標二三〇万円をはるかにこえて）を得て、撒水装置を含む校庭整備、視聴覚教具（親子テレビ二二台とテレビカメラ・一台）・図工教具及各教室にスチール黒板（二五枚）等予期以上の質実備った整備をしとげられた。

この年、「引揚者等に対する特別交付金の支給に関する法律（第一一四号）」が公布された。

外地に「生活の本拠を一年以上もった」人が、終戦などのやむを得ない理由により本邦に引揚げることになったために、在外財産のみならず、生活利益その他、生活に根ざすすべてのものを失った打撃に報いる趣旨とのことで、翌年二月、わが家四名分、二一万円の国債を交付された。

昭和四三年、この年は「明治百年」に相当して、諸行事が行われる。私の年賀状を披露する。

謹んで昭和戊申、明治百年の新春を寿ぎ遙にあなた様の御健康と御仕合をお祈りいたします。想えば私、明治戊申正月十二日、生を享けて六十年、真に夢のようでございます。

昭和五年渡台 十一年結婚 十八年応召 敗戦により二一年引揚帰国 今日に至りました。公僕生活に終始 ひたすらにその分に甘んじて参りました過去に何等悔ゆることなく その間教え 導き 戒めて下さいました皆様の愛情（四恩）を今こそ染染（しみじみ）と想い起しております。

現在健康にも恵れ町役場に勤めての余暇は 物云わぬ「野の仏・板碑」などに語らいかけております。きびしい生活を逃げるのではなく 世相や政治に目を閉じるのではなく ありませんか？

家族一同 健やかに己が道を進んでおります。今後とも よろしく御願いたします。

昭和四十三年元旦

一月末、三兄から贈られた、浜名湖畔館山寺温泉への還暦記念旅行。われら最上の日であった。この年、町会費月額百円に、会員数四三〇。五月、石川常太郎町長再選。十月、町村交通災害共済制度ができて、全町内加入する。十一月、明治百年と睦会結成二十周年を記念して、町内親睦球技大会を開催、以来年間行事となった。伸びゆく町の有様を記録した『会員名簿』を作成する。十二月、貫井喜代次氏、民生・児童委員となる。

昭和四四年。満六十才を以て、定年退職した私は、念願の台湾旅行を実現した。

一月四日、羽田発空路台北へ、旗山・六龜・桃源・中壇・美濃・恒春・滿州・屏東・高雄と旧任地の知己を訪問して旧交をあたためるとともに、先輩・友人と亡兄の展墓を行う。引揚以来二十余年幽明境を異にした人びとも多い。さらに、台南・台中・台東・花蓮と、東海岸を経て台北へ、一か月の旅を終えて帰宅した。思えば紅顔二二才にして渡台、そして引揚帰国。今耳順（六十才）を越してこの年、念願の夢果し得て感慨無量であった。二月から再び水道課の業務を手伝う。

十二月、志茂二野球部が結成される。町内同好の士が、親睦を兼ねて、青少年を指導されるという。後援会ができて、野球具を調達してその奉仕に報いた。美しい話である。

昭和四五年七月一日、福生市誕生。人口三八、七四九人。（昭和四三年六月、人口三万人以上をかえ、市との行政格差に悩む全国三三町が「新市制全国期成会」を結成、二年間にわたり地方自治法の一部改正につき運動をつづけ、四五年三月、第六三国会で可決「三年間の時限立法」された）

町制施行して三十年である。福祉会館が落成。老人の部屋、図書館など併設される。

長沢縄文遺跡の発掘が、市民参加の下に行われる。この年大阪で万国博覧会が開催される。

十月、市の衛生課に公害係が新設される。

昭和四五年 一一、二五三戸 三七、九四三人 男一八、六一一人 女一九、三三二人（国勢調査）
わが家でも、二月二八日、光史が、森由美子と結婚。七月二三日、妹きくえ、小福田史男と結婚。孫の浩は小学校に入学。私どもおかげさまで健やかで好き隣人に囲まれて日々是好日。

昭和四六年四月、都知事選及市議選が行われる。末次性男（再選）、貫井喜代次（阿氏当選）。山中正雄氏、民生・児童委員に任命される。福祉会館への「老人送迎バス」の運行が始まる。

恒例のお祭り広場を四区（志茂六一）へ移す。防犯モデル地区に指定されて、防犯意識が向上。長沢遺跡第二次発掘が行われる。

十二月、市の木Ⅱモクセイ。市の花Ⅱツツジ・サツキと決定。

十月、わが家は、長男の三三回忌と、二女（二十年没）の供養のために、墓碑を建立回向する。

昭和四七年の日米首脳会談で、関東地区の米軍施設を横田基地に集約することで合意。これに基いて、いわゆる関東計画が四八年から始まり、基地内で施設の新・改築が行われることになる。

基地の存在は好ましいものではなく、基地からの弊害を甘んじて受けるということではないが、日本が置かれている国際的な立場からすると、基地の存在はやむを得ない宿命的なわが町である。

四月より、町内防犯灯の維持管理は、市の建設課管理係に移管される。福生新民謡『福生よいとこ』と『ほたる小唄』ができて、振り付もつく。

五月の市長選は、石川常太郎氏三選。九月、福生神明社が、市民からの浄財寄進によって、新しく社殿の造営と、境内が整備され、崇敬会を結成、二九日遷座祭が盛大に執行された。

昭和四八年、志茂第二町会、四八五世帯。睦会館に、小会議室及管理人室の増改築が行われ四月十七日完成。工費三一五万円は全会員の献出によった。（寄付金総額三六五万円余）

福生市は、『健康都市』を宣言。環境保全課を新設し、市民体育館が完成。

市民の郷土に対する認識をたかめるとともに、文化の向上に貢献することを期して、「文化財保護条例」を制定、文化財専門委員として、森田潤三・石川弥八郎・立川愛雄・島田宇一・宮岡一雄・川鍋幸三郎の六氏を任命発足した。

『幸福駅』から『愛国駅』の切符ブームに乗って、『福生駅』も、『福が生れる！』と縁起をかつぐ人たちで、六月頃より売れ始めた。五十年の正月は最高調に達して、元日には、二万三千枚が売れたという。

七月、志茂部落では、祭り用の山車^{だし}を新調する。材料費以外はまったく有志の奉仕によるものだった。九月三十日、町内に、『志茂輸血会』が結成されて、第一回の献血奉仕が行われた。

昭和四九年四月から、志茂二納税貯蓄組合を町会組織内に吸収して一本化することにした。

福生市も、おしよせる都市化の波をうけ、義務教育をうける子どもが、年々ふえている。これに伴って、小・中学校の増設が必要になってきた。多摩河原区画整理地区に、昨年以來、第七小学校と第三中学校の建設をすすめてきたが、四月一日開校。二校の通学区域は、栄通りから多摩川までの、住宅公団福生団地を含む地域となって志茂部落の一部も編入されることとなった。

夏祭りは、チビッコ広場予定地（志茂八四）で行い、揃いの祭りハッピ（五五着調製）もできて、はやし会・民謡会・民謡会の人びと、老いも若きも一体となって賑うのであった。

昭和五十年一月から、「子どもたちが安心して遊べる広場を」と土地所有者をはじめ、市民の協力によって、「チビッコ広場」ができる。設備は鉄棒、ブランコ、砂場、水飲場、便所など。

二月、給水人口の増加や、地下水の枯渇などで、市内の水源だけでは必要水量をまかないきれないこと、東京都の水道料金と他の料金の格差をなくすことから望まれていた、水道事業の都営一元化が実施され、三多摩格差といわれていた料金や給水量の問題が解決される。

四月、都知事選、美濃部亮吉氏三選。市議選には、末次性男氏三選、貫井喜代次氏再選される。

志茂部落では、町会費月額二〇〇円に値上。従来会費以外の雑収入（会館使用料・祭典寄付剰余金その他）に依存してきた町会の経理を健全な運営に改めることにする。会員数五八五で総予算一八九万円の六〇％を会費で確保できることになる。昨年度決算収入の内、会費は三八％だけ。これからは、町会の運営をより積極的、親睦と福祉のより明るいまちづくりに進もうというのである。

本年度から、納付制となつて集金取り扱いが廃止され、納税組合の機構が変わることになる。五月一日から、地元の要請で、米谷医院前通り八〇〇米が、毎日曜「児童遊歩道」となった。七月六日から、市民の強い要望がいれられて、休日診療が（市第二庁舎）開始されることになる。

夏祭りは、部落では久しぶりに、揃いの浴衣もできて、チビッコ広場はたのしい催しがつづく。盆踊り、子ども花火大会、夏休みラジオ体操の会など、親子ぐるみのつどいが行われる。

七月二八日、多摩河原地区の区画整理事業が完了。町の区域は、南田園一・二・三丁目、北田園一・二丁目と設定される。体育館・プール・都市公園六か所、五小・七小・三中・都立福生高校など健康で、文化的な地区として、団地群の造成も相つき、明るいまちづくりが進んでいる。

市制五周年を記念した第二五回目の「七夕まつり」が盛大に催され、ミス福生コンテストも。

十月、国勢調査実施。私も、調査員に任命される。台湾で二回、当地でも、四回目の任命をうけた。

昭和五〇年 一四、七七七戸 四六、四五六八 男二三、二八二八 女二三、一七四八（国勢調査）
東京都の二六市中二四番目。都全体の人口（千一六六万九、一六七八）に占める割合は、〇、四％。国勢調査は、大正九年に第一回調査が行われてから、十二回目であるが、過去十二回の調査人口の推移を見ると、第四回調査（昭和十年）までは、人口増加はごくわずかだが、五回目（昭和十五年）以降の調査からは二五％～四八％の人口増加を見せている。当時の福生で、急激な人口増加を示す大きな理由は前に述べたように日本陸軍の進出があり、現在の横田基地としての、軍関係者の転入と、米軍相手の営業者などの転入が続いたものであった。（一五九頁参照）

第十回調査（昭和四十年）以降には、調査ごとに平均八千人（年平均千五百八人）の増加を見ている。これまでの増加にくらべると、およそ二倍の伸びだが、この頃になると、基地の影響は影

うすれ、全国的な大都市への人口集中が影響し、福生市も東京のベッド・タウンとして、人口が増えてきたことによるものである。第一回の当時と比べると、人口は九倍、世帯数は十八倍に伸びているが、一世帯当たり平均六人だった世帯構成が、今回は三、一四人と半分に減っているという。このことは、いわゆる核家族化の傾向を示しているものといえよう。

福生市も年々緑が失われ、都下二六市中でも二番目に少ない市となっていました。農耕地の宅地並み課税などからまだまだ開発が進むと思われ、快適な生活環境をつくるため市民ぐるみで残された貴重な緑を守り育てていくということと、「福生市の緑を守り育てる条例」を、十月三日制定。

昭和五一年元旦、私は、年賀の挨拶を次のように書いた。

明けましてお目出度うございます。皆様のご多幸をお祈りいたします。

私も六人目の孫もできみな健康でございます。昨年は多事でございました。

同好の士と「多摩の歴史シリーズ 福生」を執筆、福生市郷土史研究誌第一号「横田穂之助日記」発刊に参加、文化財展示会も十一回目、沖縄海洋博見学（妻と共に）の機に、念願の沖縄戦跡巡拝 慰霊の旅を果し得ました。

さりながら 諸行無常 敬愛した方々の訃音も相つぎ 今さらに一休禪師が歌も想い出されるのでございます。「正月は冥土の旅の一里塚 目出度くもあり、目出度くもなし」とかや。次兄秀雄とも死別、まことに「一期一会」と申さるごとく、ただただ信ずる道をひたむきに、生きたきものと、念ずる次第でございます。

合掌

昭和五一年一月一日

三月三日、福生市の未来を築く「活力ある市民のまち」目指して、「福生市基本構想」を制定。旧市民会館のあと地に、学習等供用施設「仮称福生市民会館」（工費十五億余円）建設工事着工。五月十六日、石川市長が四選される。

「福祉と教育は一本である。市民のだけれど、お互いの人格を尊重し、思いやりの心をもって毎日を過すことがなければ、与えられた福祉しか存在しないことになるからです。そしてこのような市民が育つためには、市民のみなさんが、お互いを理解し合い、高め合う機会が必要であり、お互い集える場が必要となります。」

このことから、教育と福祉は切り離しては考えられない一体のものであるといえます。今後四年間、私は、これらの考えに立って福祉充実の施策に取り組んでまいりたい。」

と所信を述べられた。

むすび

福生珠算学校創立三十周年を迎えるという。この間三児みな、三・二・二級と揃ってお世話になる。

長女は主婦として、妹娘は主婦兼、教諭とし、伴は今、メキシコ政府観光審議会の日本駐在責任者。

思えば、私も、ふっさつ子三十年、子どもたちもこの地で育ってきた。今はそれぞれ離れて己が道を歩み、古稀を迎えようとする現在、みちたりたとはいえぬが、健やかに、ささやかなしあわせをかみしめながら「日々是好日」の境地である。よき隣人にも恵れ、妻も頑張ってくれた。

「引き揚げの 乏しきなかをつつましく 逞ましく生く 妻を愛しむ」

健康の許すかぎり、引きつづき、水道事務所の（集金・検針業務）御手伝をさせていただく。

その余暇は、「温故知新」同好の方々（文化財調査会・多摩郷土研究会の会・多摩石仏の会・多摩考古・多摩文化の会など）に教え導かれながら、学習をつづける。福生をこよなく愛する者の一人と自負しているゆえにまた、いささかなりとも奉仕のおもい忘るまじくと念じつづけている。

（福生市文化財専門委員）

私の歩いた道

安田 弥与子

憂きことのなこの上に積れかし

かぎりある身のちから試さん

母の一生を貫いたこのうた、それはまた、私の過ぎ越し六十三年でもある。

明治四十五年二月四日、板橋町に生れ、北多摩郡調布町で小学校入学、南多摩郡多摩村で二年から四年まで、そして大正十年六月十日、熊川村七十一番地に移り、十分に花鳥風月を楽しんだ。家族八人になって、そこは手狭となり、昭和三年、五六一番地に家を新築、転居五回の目まぐるしい生活は一応終止符を打たれたことになる。

自己主張はおろか、人前で話すことさえできないため、一年の頃は親の自慢の種だったのに、二年で級長にされたのがおそろしくて、すっかり殻に閉じこもる。いや、我と我が芽を摘んだのだ。加えて転校の度に「よそ者」という偏見から、何度か悲しい渦の中に巻き込まれた。

それかあらぬか、物心ついてからというものは弟妹の子守りに明け暮れた。ここが唯一の逃げ場であり、憩いの時だったのである。陽の当たらない道を求めて歩き、眩しい太陽の下は人に譲る。自業自得で、まわり道ばかりするために便乗された部分が何んと大きいことか？

ところが、社会的には陽の当り通し、と自惚れでなく云い切れる存在だった。親の七光りは実際に借家も流転も感じない。到る処に善意あり、好意があつたものだ。だから今でも

「安田さんの娘時代は幸福の塊だった」と信じている人が随分多いようだ。

それはそれとして素直にいただこう、せめてもの憩いだから……。ところが事實はまったく逆。

六才の時、はしかの弟をつきつきりで見と、同年生れの弟から始まって二年目毎に生まれた弟妹を、おぶったり、手を引いたり……。そして十二才の三月、母が脳溢血で倒れたために二才の弟の母親代り、病人が気を遣うから……というので、しばらく近所の知り合いの家へ預けられる。その時の苦悩こそ生涯を通じて最大のものである。一人になることを恐れる弟の悲しみは解る気もするが、学校へは行かなければならない。幸か不幸か高等一年なので始業時間ギリギリに出かける私の後を追って泣き叫ぶ。

「姉ちゃん、行っちゃいや、僕もつれてって!!」

どう宥めても、どうすかしてもきいてくれない。しっかりと抱いて、話して聞かせ、逃げるように

学校へ行ったが、決して心ここにある。

すつとんで帰ると、もう一刻も傍を離れない。夜はまた異った苦しみだ。疲れ果てて、ぐっすり眠ると、母とまちがえた弟の手が胸を探る。そつと戻して寝つくと、今度は手洗い、夜もオチオチ眠れない。約二ヶ月のこの苦しい生活は思い出す度に涙がはうり落ちる。

父の偉業

昭和二年、八人家族に借家は無理、幸い東京都から低利資金の貸し出しを受けたり、知人からも借りて、新築を始める。偶々学校からの帰りに立ち寄った折、父と一緒にあった。

「お前の化粧部屋を造ろうね」

いつもいつも胃の痛みをこらえながら、瘡を細った身体を、両の足で代る靴を蹴つとばしてようやく運んでいるような、悲しい姿を、どこにも見る事ができない程嬉々としていた。

昭和三年、完成した家は、父が畢生の大偉業である。子供の私でさえ、何とも晴れがましい。湿気を殊に嫌った父が、最も意を用いた土台は、いやが上にも入念に、当時にあつて可能な限りの粋をこらしたものだ。中でも出色は庭である。

「近郷近在に見られない」

絶讃を浴びたのも道理、主たる植木は、何百本という名木の中から、好きなのを十本、という

御芳志をいただき、出入りの植木やが、専門家の目で選り抜いたもの、その他にも何人かの方が手塩にかけた愛木をお贈り下さる。石はお手のもの、といった具合で、正に愛好家にとつての垂涎三千丈もの……。

皆様の御厚意の結集は、えもいわれない情趣を漂わせる。どっしりとした重量感あり、落ちついて、父自身、全然予期しなかったであろう優雅な家となり、しばらくは病苦も忘れたように思えたことをおぼえている。

来る人、通る人、等しく感嘆の面持ちで眺め、話し合い、しばし歩を留める。

裸一貫で、故郷熊本をあとにしてから、つなぎ合う手もなければ、引き上げてくれる手もない、ひたすら内助に明け暮れる母の絶大な協力があり、周囲の方々の献身的な御援助をいただいて、今日を迎えた。長い苦しい幾歳月が更めて去来する想いであるう父に、

——ご苦労様

と深く頭を垂れる。

母の感慨もいかばかり？しかも、すぐ横に

「片岡さんの家を守るために!!」

と貯水池を造って下さったとのこと、正に錦上華を添えていただく。

「恒産あつて恒信あり」

父の座右の銘、「家」という名の重みは最高のもの、生活のための絶対的条件である。現在心ならずも借家暮して四苦八苦している私には高嶺の花でしかないが……。

ところが、この家の借金の担保というか、人柱というか、それが十六の小娘だったのだ。何も知らずにただ感謝していたのに、偶然十八の時、転任を止むなくされた縁談に際して、

「この家の借金完済と、兄の大学卒業まで、絶対に結婚させない」
わが家の不文律を他人の口から知らされたものだ。

青春の門出

女らしく、しとやかに、家庭におさまって美しい青春をこの家で過そうと、青写真はでき上った。とても忙しい。

「姉ちゃんはお勤めしてね、チャコ（妹）は家に居て、母さんの手助けをするから……」
とんでもない。人前で口もきけない姉に、生意気な!!と思ったが、

九月頃のある日、突然

「お前はオルガンが弾けるか？」

「エエ」

何気ない会話だと思っていた私に、

「それじゃア小学校の先生になりなさい」

「……………」

びっくり仰天、子の心、子の能力をまるで知らない。さらに追い打ちをかける。

「免許証をとりなさい!!」

勿論無試験検定だから文句はない。

矢継早やに命令が降る。

「視学に挨拶をして来なさい」

「ハイ」

こんな無気力、無自覚なスタートが、私の社会人としての在り方だったのだ。視学の家を訪ねて見ると、まず肝をつぶす、机の上は履歴書の山、

「この通りだが、貴女を最優先する」

できるだけ遅くしてほしい、と祈りながら、悲しさ一ぱいで家路をたどる足はとても重い。

慌しい時の流れにオロオロする毎日、先生になるなどもつてのほか、と自覚した時はもう手遅れ、十二月に入って、たった一人の妹が疫病に罹る。一室に閉じ込められた私は、他の家族にうつっては困るというので、つきつきり、入浴以外は外に出られない。懸命に回復を祈りながら……。

看病の甲斐もなく息を引きとる。

そんなことがあって、丸っきり心を奪われている中に、来たのである。

「南多摩郡川口村川口青年学校助教諭兼川口尋常高等小学校訓導ニ補ス」昭和三年十二月三十一日附の辞令が……………。

晴天の霹靂といえはおかしいが、事実はそのなのだ。いよいよ先生にされてしまった。どうしよう。

無試験で検定を通すからには予備知識位は授けてほしかった。ただの一度も授業参観さえしたことがない。それでも時は容赦してくれない。

一月八日、慌てて肩揚げをおろした着物に靴を履き、踵かかとのかくれる程の長い袴で、どこをどう歩いたのかまったく夢中、とにかく学校のすぐ前でバスを降りる。待ちかまえていた子供達が、波になって、一斉に押し寄せて来る。

「新しい先生だ!!」

スーツと全身の血が引く、手も足も冷くなって、足がもつれそう。一寸した坂道を上って、門から玄関まで、左右に列ぶ子供達の前を、父に従い居所にひかれる羊さながら職員室へ、校長以下五人全部男の人、あらためて「先生」を意識すると、それぞれ堂々としてご立派、またもや縮み上る。

号令台に初めてのり（立ったのではない）、ボーッと目の前がかすんだこと以外はなんにも憶え

ていない。消えも入りたい思いで第一日を終った時に、とにかく覚悟した。もはや絶体絶命、何
がなんでも突進しなければならない。ビシーツと一本の筋を通す。もう親に頼ってなんかいら
ない。

「驚いたなア、片岡さんには……、お父さんに付き添われて赴任する先生なんて、見たことも
聞いたこともない」

何日か過ぎたある日、校長がしみじみと私の顔を眺めて述懐する。

先生になつて

月給日がやって来て、渡された袋に入っていたのは五十円、まだまだ「金は不浄」的意識が残
っているし、特に必要も感じないのでうっかりしていたが、その頃女学校の先輩が二十八円、大
学出の秀才で、家族三人抱えている男の人でさえ、四十円（勿論代用教員）と、あとから聞いて、
あらためて冷汗をかいたくらい……なもの。

十円を役場の半強制貯金、二円が当時最高の簡易保険料、それになにがしかの本代、等を明確
に書き添えて父に渡す。するとその中から五円の小遣いが戻ってくる。翌月はそれに加えて、同
じ要領で父へ……。したがって、その時の何分かは財布が空っぽ、毎月毎月、それは十二年間全
然変ることのない繰返しであった。

本質的に、先生としての能力がない。もともと率先などという行いはもつてのほか、まして、
子供でもズラツと並んで注目されると、途端に愉快がつく、だが、たった一つ取り柄らしいもの
といえは子供が好きなことだ。

「この子の背中が空いたことがない」

母は誰彼となくこう話していた。親の云いつけとはいえ、好きでなければできない。学校から
帰るのを待っている母も子も、とても喜んでくれる。

「あんまり子供を可愛がると、自分に生れないという話だけだね」

何か予言されたような結果になったが、とにかくにも、弟妹は自惚れでなくなつてくれた
し、長いキャリアで子供を機嫌よく遊ばせるテクニクだけは、人後に落ちない。

そうだ、これが唯一の武器だ!!と気がついた時はいくらか楽になった。「若さ」と「一心」は
恐ろしい。一緒に遊んでいると、

「先生の手、象みたい」……太いから。

「先生は鋒みたい」……袴の紐をグルグルと幾重にも巻いて、そこだけ細くなっているから。
遠慮なく悪口を投げかける。ある時は蛙を捕えて来て、

「先生、これやるよ!!食べるとうまいんだよ」

「嫌いな、気味が悪いから……」

「やるよ」

「いらない」

少しチエの足りない子だが、面白がつてわたそうとする。追われて、逃げて、ヘトヘトになった時は、その手に蛙がなくなっている。二人で芝生の上にペタッと坐って、腹を抱えて笑う。

こんな調子で、だんだんと子供達が親近感を抱いてくれるようになると、目の前が開けてくる。

一方、距離的にはさして遠くないのに、交通機関が不便なため、時間的には大変難儀をする。

九時に間に合うためには、拝島発六時五十分、五日市行き有蓋貨物車に椅子一つ置いて「客車」に変身、大体動作が緩慢だから、万全を期して用意してくれる母の心尽しに反し、女学校時代からいつも時間はギリギリ、父から、

「娘を頼む!!」

の一言で、駅長、助役さん達がいつも心を配って、姿が視界に入ると待っていてくださる。死物狂いで、線路を横切り、ホームにとび上り電車にとびのる。「間髪を入れず」ピリピリッと発車。

ところが、今だに気がとがめることは、ある朝すでに駅を出て、今や踏切にさしかかろうという時、ようやく近くまでかけつけた。これを認めた踏切番の人が、やにわに白旗を赤に持ちかえ

たものである。こんなことまでは思いも及ばない私の目の前に汽車が止ってくれたことさえある。こうして、どれほど救われたか知れない。決して甘ったれて規則違反をした訳ではないが、こうした性格的なろまさか「人生の乗り遅れの現象」に当然つながり、どれほどマイナスになっているか知れない。

雪の日はまたいうにえない難行である。当時は必ず何十センチも積ったものだ。第一電車を利用する人などほとんどない。畠ばかり続く辺り一面、見渡す限り白一色、足跡といえは稀に犬ぐらいのもの。「あした」という高い歯のついた下駄は、その間に雪を挟んで難くない。歩く度に身体の重みで雪の層ができる。十歩も進んだらもう大きな石がはさまったと同じ状態になって、結局、こけつ、まるびつ、となる。雪をとっている時間はない。恥も外聞もかなぐり捨て、いきなり傘を投げ出すと霏々と降る雪の中、弁当箱を腰に結えつけ、足袋は袂に、下駄をぬぐと、ジーンと頭の芯までつきささる。急いで袴の紐に鼻緒を通してしぼりつける。我ながらびっくりするほど素早い。さて、片手に傘、片手は袴と着物裾をもって、一目散……。冷くて、寒くて、半分泣いている。

しかし、駅についた頃、足はもう真赤、ポツポツと湯気がたっている。身体は汗でびっしょり……。

「今日は大変だね」

声をかけて送ってくれた母の顔が、チラッと目に浮ぶ。

神 経 衰 弱

月日が経つにつれて、ますます非力、無能が深刻に骨身にこたえる。加えて、主力である青年学校は、自分より年下の人などほとんどいない。教材も各々が勝手なものを持ってくる。

毎年、一月から三月まで、毎日もっぱら裁縫を習って来ているその人達は、少なくとも技術的には先生である私よりは優れているはず、どうにも恰好のつけようがない。その他に、四年から高等科までの手芸、裁縫、そして高等科の家事。

ある日、小学生を教えていた時間中、青年学校の生徒が来て

「先生、これ、どう裁つんですか」

「こうよ!!」

教えたのはまったく反対の縦、時間が来て帰ってみて、こちらが驚いた。男袴の後だてといえど急所。しかもつい一年前、卒業作品で丁寧に教わったばかりだから最も印象が深い。何でもない常識的な間違いを心から残念に思ったが、すでに後の祭り、しかも期日がないというので、身も細る思いではぎ合わせ、どうやら許してもらったが、納らないのは良心、さんざん苦しんだ。

四月からは、女一人増員、同時に始業が一時間早くなる。もちろん実家からの通勤は不可能に

なり、二人一緒に下宿する。月十七円也、始めて父母の許を離れた物珍しさはあったものの、家、就中母が恋しい。帰心矢のごとく、土曜は朝から気もそぞろ。しかし、日曜になると、当時は暮れてからの「女の一人歩き」は絶対に許されないもので、明るい中に下宿に帰らねばならない。心の中は涙でいっぱい。

純白な子供は色も香も着け易い。社会人としての基礎教育は小学校、未熟な私がどうしてこんな立場におかれるのだろうか。どんな失敗でも他の職業なら即座に責任をとれる。消せば元の白紙に戻すこともできる。しかし先生はそうはいかない。一挙手一投足が子供の目に、耳にそのまま映像となって、知識となる。大それた職についたものだ。

そんなことを考えると息も苦しい。そしてだんだんと悩みが深刻になっていく。

やがて、眠れぬ夜が始まり、肉体的な変調に苦しむ。でも学校は休めない。夏休みで気が弛むと病勢はさらに進み、幻覚に襲われたりもする。ところが不思議に子供と遊んでいる時は、ケロツと忘れてしまう。

断崖絶壁を目の前に、どうしてもここを上らねばならない。そんな夢は今だに私を苦しめる。

「財産がないからせめて男の子だけは大学を出してやりたい」という親の悲願で、当時四人の兄弟は、中学から大学まで全部私立、しかも現在とちがって、家にいる間は誰も全然働かない。だから私は一銭のむだ使いも許されない。「女」という悲しい性だったのである。幼稚な先生の対

象にされた子供達こそいい迷惑だと思つと堪らなくなつて何度高い山、深い谷をさまよつたか知れない。だがそれもいつしか子供いとおしさに変わつてしまひ、今日の生活の礎となつたのである。

研究 授 業

南郡が何部かに分れている。ある日校長に呼ばれ一大事を宣告される。つまりその部活動としての「裁縫科研究授業」の当番校になつたのだという。単位としての自分の学校でさえ経験してないのに、どうしてそんな恐しいことができるだろうか。しかしすでに「断」は下されている。否も応もない。

それにしても「盲、蛇に怯じず」とはよく云つたものだ。知らないからこそ出来たことには違いないが、どうせ恥はかきついだ、と悲壮な決意をする。

いよいよ正念場、朝の空気が身に泌みる。午前中の授業は上の空、「チリン、チリン」と、誰かがふつた鐘の音を聞くと、案外素直に足が動く、教室に入って、子供といつしよに參觀者を迎える。

先ず校長方はまあまあ、と一寸舐めてかかったが、その後に続く女の人達は、それぞれ一騎当千（私とき情ない存在は例外）のはず、ままよ!!と、はじめてはみたものの、どんなにかくしても

板書は見事に震える。仕方がないので、子供達に作業をさせ、相手の注意をそちらに外らせて、そつと書くことにする。机間巡視も前の方だけ……。

「鐘よ鳴れ」、そればかりが頼みの綱。

終つて、ホツとする間もなく批評会、これが最も嫌な時間、完全に刎板にのせられた鯉である。

先ず校長挨拶、開口一番

「ご覧の通りのかけ出し、今日のところはどうぞお手やわらかに……」

まったくだ、本気で取り組んだら、正に満身創痍、立ち上れない。だから……、

「雨に悩める海棠云々」

「字がうまい、子供に見せながら書くべきだ!!」

といった調子で終始する。いや、敢えてこれだけをいただいた、というのが本音かも知れない。結論として、資質のまるで乏しい「先生」への激励を受けた感謝と、感激だけが残つたことになる。

しかもこれは決して自らの努力ではない。親から享けた血、あらためて手を合せる。

福生 小学校へ

まがりなりにもいくらか「先生」が板について来た十八才（昭和五年）何となく身辺が騒々しく

なつて来る。

當時は三流の毎夕新聞に「ポスト」という投書欄があつて、突如私の名前が出たという。校長に呼びつけられて、

「目立つからいけない。着物は紺緋にしないさ」

二度目、

「又出たじゃないか、十七や十八で南郡一の先生」なんて、どうひいき目に見たつていただけない。何か意図がある」

何といわれても私は尚困る。三度目は

「外へ出るな」

思案投げ首の校長はいうが、僅か二、三分の下宿と学校を往復する以外歩く時間がない。

加えて、校長を通しての縁談を断つたこともあつて、「権力の前に屈服」ということになり、昭和五年八月三十一日附、私には突然、福生小学校への転任が命ぜられる。たしかに表面上の栄転、しかし山の中の小さな学校、それだけに村ぐるみ親しみが感じられたし、先生も生徒もまったく家庭的、少しばかり心の余裕も生れて来たところだ。だが仕方がない、これも運命。

十八才はここでも最年少、だから月給が大いに問題になったという。不意の転任でまったく気がどうてんしたし、借金はともかく、中学、大学の兄弟は女一人の血みどろの苦闘を尻目に派手

に遊んでいる。しかし前述の状態で小遣いは一文もないに等しい私に小遣いをせがむ。この頃程兄弟を疎ましく思つたことはない。駄馬を打つ鞭も時には不満で手が鈍る。

そんな時、話にならない問題が起きてしまった。厚意を当然とする境遇に育つて来た幸福が裏目に出たのである。責任を必要以上に感じた私はついに我とわが身を窮地に陥れた。そして一年の短い在任におわつた福生小学校だった。

だが、子供達は可愛かつたし、よくなつてくれた。殊に新学年で校庭に並んだ全校生徒の前で、それぞれ担任の紹介があつた時、

「二年女子、片岡先生」

すかさず応えてくれたのが可愛い歓声。中には跳び上つて喜んでいる子もある。先生冥利に尽きる、とこちらも有頂天になつてしまい、絶対に期待にこたえよう!!と、固く心に誓つたのだ

が……。
「貴女は子供への愛情が強い。子供に好かれることは教師として最高の資質、大切にして挽回を!!」

校長から贈られたこの饒別は、誠に金鉄の重みである。シュンとなつて、深く胸に刻む。

「ごめんなさいね」

「許してね」



青梅2小(昭10入学)卒業生とのクラス会にて(昭23)

頑として拙げない。転任先も三十六対一をかち得て、立川の新設校に決ったあとだ、何のことやら全然わからない。

結局父のペースで、アツという間に破談、逃げた魚は大きい。しかも苦しい、悲しい青春であっただけに、許されて、始めて見た甘い夢は大きくふくれつつあった矢先のこと、傷は深い。痛い。しかし私にはどうにもならない。荷物は人目につかない所に押し込められ、私の失意と一しよに陽の目を見ることができない破目になってしまう。

とにかくまたもや運命に押し流された。新設校は忙しい。真新しい木の香を満喫しながら、いつか二十四才になって、俸給云々は陰を潜めたし、五人の女子職員の主席だからというので、何や彼やと重荷が肩にのる。しか

胸も裂けんばかりの悲しみを抱きながら、ろくに別れの言葉も交さずに福生小学校を後にしなければならなかった。

昭和六年九月、調布尋常高等小学校へ。

「みんないい人達です。腕っこき働いて下さい」

言葉少ない校長、温顔に接してホッとする。山紫水明のこの地は、人の情もこまやかで、誰も誰かが温かく、傷みは日に日に癒えて行く。

縁談破れる

昭和九年、父の退職と兄の大学卒業、そして熊本の甥に退職金全額だましとられる(母からずつと後で聞いた)。

翌十年(父は腹痛をこらえながら囁託として、二度の勤めをしていた)、偶々父の上司からの縁談に真剣にとりくんだ父は、傍目には大変乗気だ。私立中学五年の弟の学資と小遣いは引続き働いて、毎月送る約束で、話はどんどん進み、結納も済んで、式の日取りも決った。道具もそろえ、わざわざ家紋を入れさせるといふ熱の入れ方、

ところが、急に

「どうしてもやれない。嫁くのなら弟もやめさせるし、縁を切る」

し裁縫専科ということで、作法室と裁縫室はどんな調子にでもカラーが生かせる。大変充実した毎日は楽しかった。ところがその四月

「大変難しい級なので受持つてほしい」

二つ返事で引受けた子供達は実によくついでくれる。厳しい^{しつ}躰に堪えぬいた一年後にはまったく手足のように、思うままに動いて、よく学び、よく遊んだ。

書方、綴方、裁縫、手芸、受持の他にもほとんどの級に接触があつて、随分苦勞はしたが、みんな弟や妹のように可愛い。研究授業もさして怖くないし、いつも書方で押し通す。

苦勞を共にすることは、お互いが親密になる。学校ぐるみまるで家族のようだ。小使さんは背の高い、がっしりした人、がんこで気に入らないと誰でもどなりつける。お婆さんは半分位しかない、芯は強いがいつもビクビクしている、心からやさしい人。

「片岡先生、ご面会でございます」

それは大好きなさつま芋、さかんに湯氣を立て、パクツとあいた紅い口からまっ黄色な肌をのぞかせている。歓声をあげる私、その向うにおじさんが相好をくずしている。

大好きな花は毎日切れない教室、全然教えなかった級の一人、カギツ子なので愛情に飢えていたらしく、なんとなくついでにくれた男の子。

「片岡先生、花を上げる」

何の気なしに歩いている廊下の下の窓から花だけ差し出して、急いで馳けていった子が、十四の瞳を見て先生に会いたくなつた。住所を教えてほしいと、受持ちだった子を訪ねて来たという。合憎知らなくて……と残念がついていたが、こんな情愛も育まれていたのだった。

だんだんと戦禍が拡大、女学生を頭に、生れて間もない子供まで六人、財産とてない家庭を母親一人に任せた父、努力の末会社を興した父、そんな人まで召集され、必死の生活を目の迫りにしていた折、各界代表からの意見をのせていた都新聞からインタビューを求められる。

訥弁を修飾して掲載された時は、遙けくも来つる。余りの隔世感に我ながら驚嘆する。

二度目のはなし

「苦しいか、すぐ癒るよ」

煙草盆をもつて、病床の枕元に来ると、先ず決つていう父、そして、

「片岡さんは、弥与子さんが跡をとるんだ、とまことしやかに伝えられている。早くお嫁に行かなくちゃアね」

しかしまだ大学を出したい男の子が、二人もいる。外に出た者はまったく家を省みない。

「いいじゃアありませんか、もうここまで来たんだから……」

「お前にだけ苦勞な目を見せて、気の毒だね」

年のせいでめっきり気弱になり、涙を拭う父を見るのは辛い。しかも結婚なんて自分だけの問題ではない。親、兄弟を困らせてまで嫁ぎたいとはどうしても思えない私、いわば自らmaidた種である。

齒科医開業、満州へ行きたい、帰りたい、みんな父の蚊より細い脛^{すね}をかじるのである。子煩悩の父は、男の子に目がない。

たしかに私も女、縁談だって人並にはあるし、見合いもした。が、都度断るのは父、兄は兄で、「僕が学校にいけなくなるから止めてくれ」

阻止もすれば断りもする。

昭和十五年（二十八）、安田との縁談が始まる。生き別れで四十一、子供がいなし、興信録にも紳士録にもものっているし、父は大乗り気、どっちにしてもまた形式を踏む。途中また何や彼やとあって結局十月十七日挙式と決る。そこらへんでまた大学を来春卒業の弟を止めさせるという。九月一ぱい勤めて全部納めたものは当時年功加俸もついていたので、憶えてはいないが、そんな少ないものではない。

何はさておき大問題だ、それでは九年九ヶ月が水の泡となる。それなら止めようと申出る。

「弥与子さん、親孝行にも犠牲にも限度がある。また破約なんていったら、世間で嘲われるのは大事な親であり、一人前になっている兄弟だ、いい加減に自分を考えなさい」

「しかも今止めたとして爾後これほどの話はないと思わなければうそだ。万が一独身を通ずとして、親の亡いあと兄弟の誰が責任を持つというのだ、現状から推して火を見るよりも明らかだ」

紹介者は父との長い交流があり、事情に委しい。

「人生はここ一番という時があるものだ。今度こそ心を鬼にして……」（懸命にすすめる）母も必死。

「月謝は退職金が入ったら返すとして、大阪のおばさんにもう一度頼もう」

母の弟の嫁、資産家の長女として豊かに育っているだけに人間性抜群、中学を出した弟を婿にしたために終始俸給生活の母に恩返し^{お返し}の気を遣っていた人（前にも弟のために応援してくれた）折返し送られて来た速達は多額

「お母さんを大切にしてくれた弥与子さんに饒^{あま}のつもりです。お心置きなく……。そして今までの分までおしあわせに」

そうして漸く許される。ついに不本意な借金を背負った結婚であった。

結 婚

もういい、何も彼も諦めよう!!、ようやく陽の目を見たガラガラの箆^{へら}、いただきものの夜具

一組、あとは推して知るべし、というところ、荷物というのも恥しいが、知人に運搬を頼む。

「弥与子さんの嫁入り道具だからさぞかし大変だろうと思って大型トラックにしたら、何と、前の方へベタッとくっついただけだった」

しばらく話題を賑わしたという。

私とて、一生一度の晴れ姿だけは夢見ていた。二十銭の日直料一年間、あとはずっと四十銭、昭和九年退職してから、父の懐はだんだん不如意になり、果ては職員旅行の積立金慾しさに人並のおつきあいさえしない（誰も知らないと思っただけはおめでたい、陰では話題になっていたという）で兄弟にねだられた時の用心にとっておく。したがって自らは文字通り爪に火をともした。映画館に入ったり、喫茶店に入るのは不良の仕業だと決めつけられた時代だったし、それを少しも窮屈には感じなかったものだ。

しかし、ただの一度も親にも他人にもこぼしたことはない。親兄弟の恥にならないようにと一生けんめい気を遣ったものだ。結婚して、はじめて夫となった人に

「ごめんなさい、身内の方に対してどんなにか肩身が狭いでしょね」

そして先ず叱られる。

当日、風呂敷包み一つもち、不自由な母の手を引きながら式場へ急いだが、思うに任せない。不思議なことに先輩の先生と電車に乗り合わせ、

「主役が遅れたら大変、お母さんは私が引き受ける」

正に地獄で仏、先ず門出から他人に援けられる。一世一代の晴れ姿を眺めている母の顔が鮮やかに臉に残り、最後の親孝行をさせていただいた、今は亡きその方に、あらためて感謝する。

さて落ちついて見ると、私はビクビク、ビクビク過した婚前の何日かを、父のだんまり戦術に楽しいことなど考える余裕もなかった。だがむしろその時の方が幸福であったと思うほど、両親と妹二人の家庭は面倒だった。

「父さんが絶対にやらないというので、強引にもって来た」

これこそ、母が空前絶後の父への抵抗、当時の六百五十円は大変だったが、退職金支払通知書をしつかと抱いて、片手片足で届けてくれた心情は何物にも代え難い。ほしくてほしくて堪らなかったミシンを買って、この度の嫁入道具ただ一点。

しかし父の気持も分る。何のせいか気がつかなかったが、毎日毎日少しも晴れやかな顔を見せたことがない。最もガンが相当進んでいたらしいが、酒でまぎらわしながらも毎日心身の苦悩を母や私達に投げつけて、いやが上にも家庭の空気を重苦しくする。後髪を強く引かれながら出た後も気になって堪らない。だが、この度だけは譲れない。

私の歩いた道
結婚したら、さぞ気楽になるだろう？と期待したが、別の意味で辛かった。山高きが故に尊

からず」と貧弱な嫁入り支度を何度嘆いたか知れない。

親の死

昭和十一年一月二日未明、玄関の戸が勢よく、ガラッと音を立てて開けられる。

「弥与子、来たよ!!」

勢込んで入って来たのは父、マットレスにのつたと見るやベタッと横坐りした足が蕪の葉になつてしまった。

パッと目を覚したが、多分その時息を引きとつたのであろう。ややあつて電報が来る。何とも気の毒な晩年であつたが、私だけは父故の幸福を一人占めしたように思える。その時になつて初めて反省したものだ。婚礼の支度はいくらでも立派にしてもらえる人はあろうが、私が受けた社会的優遇は、そうざらにはあるまい。しかも死んでまでとんで来てくれたのだ。子として言うことはない。

自分より年齢の若い父の死は勇にとつてショックだつたらしい。翌年、相次いで夫の両親が逝く。

当然二人の妹といっしょに暮らすことになり、三人の女の閑居生活がはじまる。実家では大学を終えた弟が、これも家を出たあと、結核の末弟と、半身不随の母だけで苦しい毎日を送つてい

る。なんとも心配でならない。もういつそ別れて家へ帰りたい。

「弥与子さんにして、なお我慢ができないときは遠慮なくこの家へ帰っていらつしやい」
嫁ぐ日の母の言葉は逆に痛い、存在価値の少ない家にはいたくない。

話をつけてもらおうと兄の家へ行つたが、剣もホロロで問題にならない。脚に瘍が出来て二度も苦しんだり、持病で何度も倒れたり、風邪でひどい発熱だつたり、がりがりに瘡せてしまった。気楽になりたいし、母達も大体想像していて、死んでしまふから帰って来いときかんに心配する。

「いいのよ、家へ帰ればしゃんとするから、でも今日はゆっくりさせてね」

その頃は物資、ことに野菜の不足が甚しかったが熊川はまだ手に入る。妹達にしてもいない方がいいに違いない。それにひきかえ親子三人水入らずの一刻は、なんとも嬉しく、楽しい。三人三様の涙を隠して帰る辛さを、お互いに意識しながら……。

疎開

十九年、鹿児島に新設された会社の社宅ができたので行かなければならない。加えて淀橋の家は強制疎開の命令が出る。

「未知の人達の中へ行くのだ、どこの馬の骨ということになるので、荷物は全部一級品を!!」

と、大型トラック一台京橋の事務所へ運ぶ。戦況不利になり海か陸か安全な方を……と待っている中、二十年三月十日、きれいに焼かれる。

一方、母も弟も大反対、沖繩襲撃も始まったし、二度と再び逢うことはできない。

「病人二人を見殺しにする気か、行くなら親子、姉弟の縁を切る」

まだ一人の妹が残っているので夫は不自由しないはず、病人を守りたいが、やっぱりある程度の摩擦は覚悟しなければならぬ。躊躇している中、物資はますます欠乏、実家では近所の人に代役してもらっていた配給が、非情にも代りを認めないということになる。嫂は全盲、当然私が代らなければならない。週二回通いながら……。

そうこうする中、弟の病勢はすすむらしい。もうためらってられない。万難を排して熊川行きを決める。

赤坂が焼けたら強制収容ときまったので、我が家は当然対象になる。早く、早く、とせかれて四月三日、移った夜熊川で空襲に逢う。

国のために、と僅かな畠から甘藷の供出、山に出かけて共同作業のできない弟は、庭の松を掘って根を供出する。まったく目も当てられない。おくれはせながら、今後の供出を免除してもらう。

当時の結核患者はほんとに惨めだ。四日目ごとにもらうのは胃腸薬でしかない。

「明け方、小便をしたい!!と思うとたんに汗が沁るんだよ」

そのうちくびの癰癤が背中^{うしろ}にまでうつって、いっぱいの吹出物、中も外も苦しみの累積は目も当てられない。そんな時幸い夫は単身鹿児島へ行ってくれるし、義妹は他家へ移る。

手当の甲斐あって背中^{うしろ}はきれいになったが、本質的には悪くなるばかり、突然、七月始め、焼けつのような暑い日、どうしても墓を掘りたい!!という。つるはしをふり上げるとヨロヨロとする。土はほんの僅かで、大きな石ばかり、二人でようやく何とか掘り上げたが、安心したせいか加速度的に悪化する。声は出ないし、咳はひどいし、八月に入ってから、三人ともオチオチ眠ったこともない。献身的な母の看病の甲斐もなく、二十三才を一期として散った。終戦直後に帰った兄の計いで基督教系の病院に入り、「イエス様に召されていく」と、天国での使命を楽しみに、喜びをさえ残してくれたことがせめてもの救いである。信ずることの偉大さに敬服せざるを得ない。末子なりに束の間の幸福はあったが、難病を抱え、逆境の家を守った生様は尊い。

選 挙

「軍人に非ざれば人に非ず」の時代が終りを告げて、頭の上に覆いかぶさっていた黒雲がとり払われたような、せいせいしたのも束の間、異った形の苦しみ^{くるしみ}がまた襲って来る。つまり自由であり、民主主義は、もう無秩序である。食べることが極度に制約され、衣料は影を消す。

こんな状態の中で一番悲しい皺寄せを受けたのが老人で、

「配給が少ないのに沢山食べる」

まで云われ、泣き泣き死んでいった姑もいる。まったく地獄の沙汰だ。また、ある夜、中央線での帰り、三人の男が一番角の席に泥酔した人を取りまき、中の一人がポケットから物をとっている。偶然隣の席にいた私が呆気にとられて眺めていると、

「この貧乏野郎、丸太棒がしょいてーのか」

震え上った私は、いても立つてもいられない。身体中汗びっしょり、そんなことは珍しくなかったらしい。

各家庭にしても、謙讓を、忍耐を、犠牲を、奉仕を、と守り通した者にはただ驚異、恩も義理もあつたものではない。まさに「道義地に落ちた四等国民」こそが堂々と罷り通っている。嘆かわしいが、口惜しいが、「目には目を」は教養が、誇りが許さない。ローマは一朝にして成らず、現在と違って家造りは容易なものではなかった。しかし、家の中の恥は曝したくないための泣き寝入りがますます不幸の輪を拡げさせた。しかして家は国の単元である。善意を無視して国の繁栄はあり得ない。自らの座は自らの手で……、動ける中に老後の安泰を図らなければ……、との願いをこめて、昭和二十六年、町議会議員選挙に打って出る。

予備知識などもちろん皆無、根まわしなど考えもせず、突如名乗りをあげる。

「町会に楯つくつもりか、挨拶ぐらいしたらどうだ」

「あんなもやしに何ができる」

等々、野次馬のうるさいこと、さらに、かつて婦人会の集りで、

「婦人会の存在を意義あらしめるために会員の向上を図らねばならない。人体を国にたとえたら国会は心臓、われわれ婦人会はさしづめ細胞、よき血を送るために努力しよう」

がいけなくて

「細胞という言葉は共産党の当用語、あれは共産党」

といった具合だったそう。責任者はまったく知名度零の夫、ただし教え子の支援はかけがえない強力なものであった。

当時は何でも自分で作らなければならない。ポスター、メガホン、その他必要なものは全部用意して来てくれる。ポスター貼り、街頭演説は、主として昭和十年入学の、現在の青梅二小、立川三小で受持った級の有志が毎日交替、手弁当はもちろん、級ぐるみ陣中見舞までいただいていた。応援、車中からメガホンをもって、声涙共にくだる呼びかけをしてくれた子のこと忘れられない。その上教え子のお父さんが、別の意味で朝日新聞に、写真入りの記事をのせてバック・アップして下さる。

多少は御厚意に報いられる予定で始めたことが、まったく志と違い、逆にすべて甘えてしまっ

やがて、『負担が大変なので離婚したい』と女の人からの申し出で、余命幾何もない病人に決定的な打撃を与える。気の毒で、何度か見舞いに行っていたが、最後になった訪問の翌日、亡くなったという通知が妹と名のつく人から送られる。

『兄の日記に、大変いろいろと貴女のことを書いてある。どんな関係だったのか聞かせてほしい』と附け加えてある。事実を知らせたが、それっきりで終わった。

そんな一幕もあって、死に直面した人を、しかも最後の日に逢うことができて、少なくとも何等かの支えになったことを、こよない仕合せに思う。こんな時間が沢山あったら、生き甲斐も増えるはず……。感慨無量である。

十一人の仲間は名譽慾もないし、譲り合いの強い人許りで、お目にかかるのが大変楽しかったが、もはや帰らぬ人が多いのは淋しい。そんな『年代』になったのである。

地味な役目というが、社会の日蔭に泣く人達の代弁ができれば仕合せ!!と、意気込んで受けた民生委員だったが、いろいろな姿があるものと随分考えさせられることが多かった。今でも心に残る問題がある。

女の人が幾つか年上、猛烈な恋愛結婚をし、二人で商業を営んでいたが、他人も羨む睦じさだ



民生委員当時（昭28秋、湯河原にて）

た。戦い済んで出た票は十五不足、しかし、決して無駄ではなかった。

「安田さんみたいな正義派が、当選出来る福生町には程遠いですね」

「あの戦法で、あれだけの支持、もって冥すべきですね」

「惜しい!!、捲土重来を……」

負けた私だが、この温かい言葉、ただ有難い。

「民生委員を受けなければここを動かない」……厚生課長、係長

「婦人会の方としては空前だが、青年団顧問に」……役員さん方、

シオンの花

「花は己れの美しさを知らないから愛しい」のだという。

花はどこに、どんな形で咲いても美しい。中でもごく自然に、つつましくやかに咲く花はとても愛しい。香がよければ、まさに屋上屋というところ、花ならずとも、戦前の社会にはそういった感じの人が大勢多かった。そのせいか、現在のように花や木をいじる人が少なかったように思う。まして、野にでも山にでも可憐な花が沢山あった。

小さい時から花が大好きで、花さえ持っていれば、大ていのことはがまんできた。特別気が弱いせいだったかも知れない。女学校時代から勤めを止めるまで教室にも家にも花の絶え間がなかった、といっても過言ではないほどよくいただった。立川の時、鬼瓦のように恐い顔をした、ずっと上位の先生が、その頃花やにもない高級のバラをもつて来て下さって狂喜したこともある。

昭和二十三年、始めて招待を受けた級会は、前述の調布小十年の新生、一年から二年二学期までの受持、二十三才の私はそろそろ自信らしいものがついてきたし、子供が思うようについて来てくれるので、夢中で打ち込んだ級である。

いよいよ明日!!という晩は臉が合わない。

「あの子、どんな風に大きくなったかしら？」

次々と目の前に浮んでは交替する。何人かは時々遊びに来てくれたので、大体聞いていたが、やっぱり早くこの目で確かめたい。指を折って見ると恰度十二年目、一人一人のその頃の様子が浮んで、朝までの時間の長かったこと……。

当日は途中逢う人ごとに吹聴して歩く。

さて、真先の感激、目の前に差し出された花、花、

「薄紫のシオンの花が咲く度に、この花大好きなのよ、嬉しいわ」とおっしゃった先生のお顔が目に見え、いつも思い出に耽るんです」

これは男の子、

「庭に咲いたんです。先生はともにお花を喜んで下さったから……」

心のこもった何物にも代え難い贈り物にすっかり目尻を下げてしまう。料理もプロ級の男の子が腕をふるってくれたもの。

荒み、乾いた世の中で、氣息奄奄、^{きそくたんたん}苦しい最中のこの一日、みんな六・七才の子供にしてしま

い、自分もまた二十三、四才を、何の苦もなく再現することができる。走馬灯のように、あのこと、このこと、よく憶えているのにびっくりしたり、喜んだり……、亡き子の霊も前もって誘って来てのおしゃべりに一体となって楽しい雰囲気をかもし出す。

満足この上もない顔、幸福以外の何物もない。時に、折にとり出しては一人悦に入っている記

念写真はルビーのようにアルバムの中に光っている。

福生一少は昭和五年九月から六年八月まで、不本意極らない短い期間であったが、十八、十九の最も波乱に富んだ時代(家庭的にも、社会的にも)である。「ひたすら生徒にしがみついた」といっても過言ではない。まして高学年の女の子は裁縫しかつき合わなかったが、実に立派だった。自信のない私にとって眩しい位、男の子は大きくておそろしいし、真赤な紋付(染めて、仕立てて五十円)を明治節(十一月三日)に着て行くと、職員室のすぐ隣りの教室(高等科)から、「赤ちゃん先生」と呼びかけられる。ほんとに幼稚なので、羽織のこととは気づかず、すっかり悲しくなったりしたものだ。

しかし、当時は職員も生徒も数が少なく、しかも血が通っていた。だから僅かのつき合いでも級会には招んでいただく。今までに一番多かった年は五回、時には泊りがけの旅行など誘われるが、年令があまりかけ離れていないので、同じ世代に生きるグチを聞いたり話したりもできて、老人という醜さも一向気にならない。子供のようにはいしゃいで、一人暮しの佻しさを忘れる。

片岡先生激励会

「離婚も辞さず」と実家に越した私への天罰だろうか、昭和三十年、夫が肺結核に見舞われる。時々訪ねてくれた教え子が

「先生、御主人ただごとじゃありませんよ。先生は休んじやいけないから、僕役所の昼休みに病院へ案内します」

結果はかなりひどい。国立でないと負担が大きいかから、と頼んで、そこまで御配慮いただく。

すっかりなくなった後のこと、私一人の働きでは十分な養生もおぼつかない。各省に顔の広い、夫の従弟に頼んで軽費扱いにしてもらって大安心。出来るだけのことをしなければ……と、懸命に働いた。

ある日、「シオンの花」の級生が車に分乗して訪ねてくれる。趣旨は、「片岡先生激励のため」

「先生が倒れたら大変、がんばって下さい。御主人をお大事に……」

御芳志の結晶やら、花やら……

この感激、貧弱な頭、乏しい言葉ではとても表現する術がない。太陽が私の上にだけ輝いているような、ただ感激、過去の悲しい涙は、今日完全に喜びの涙に変わってしまった。人間冥利に尽きる。何の取り得えもない私は、教えたというより遊んだという方が当たっているのに……。

ともあれ、こうした「人の情」は病人への測り知れない励みである。到底立ち直れるとは思わなかった、と白状した人がある程衰えた夫が、同じく沢山贈っていただいた、パスやスト・マイの力も加えられて、だんだんと快方に向い、四年後には退院出来ることになる。

この間、思いもかけない方々の情の手があり、どれほど慰められたか知れない。苦勞は消えた

が、よろこびは忘れられないものだ。

印刷屋

“生きるためなら何でもできる”、死ぬ程辛い先生修業さえどうにか成し遂げた、と自負してしまつたら大変図々しくなる。いつも教え子に甘えて来たが、すすめる人があつて、謄写版の筆耕をこころざす。一応立川時代は公認でやっていたので、胸を張って見本を届けたが、まったく一笑に付される（素人は困るということだったとあとから聞いて冷汗をかく）

しばらく習いに来いとのこと、とりあえず校正しながら勉強ということになる。その中、偶々来合わせた総理府詰の印刷やが

「この字は絶対にモノになる。ぜひうちへ来てほしい」

“強引”に負けて義理を欠き、通い始めたが、これは大変なことだ、ある時は目を回し、ある時は手を束ねる。その上腕の力たるや容易なものではない。生活はかかっているが、男ばかりの、しかもキャリアは問題にならない。しかし、やるからには負けられない。とにかく死物狂いだ。夜を日に次いで奮闘を続けた。恰度寒い時、火の気のない部屋で布団を背中に掛け、一生懸命書いていると、十時頃には眠くなる。なんとかごまかして続けるが、午前二時頃にはもうどうにもならない。井戸端に出て、力いっぱい洗濯をする。

徹夜が三日も続くと、立っていても眠れる。電車は恰好のゆりかご、専ら眠ることにする。ある時は青梅線が終った後に立川に着いた。寒風を防ぎようもない立川の駅で、新聞自動車に救われたこともある。

やがて苦勞が夷り、特定の人から名差して原稿が出るようになり、一枚六十円のところを七十円、しかも国会の予算時には一日に三十枚以上書けるようになった。

昭和三十二年、入院中の夫を見舞つて下さった友人が、会社の七十年史編纂のために三井ビルの本社に移ったのだという（北海道から）。

「奥さんが可哀想だ、幸いしばらくの間仕事を上げられるから、これを機会に単独で印刷屋になることをすすめる」

夫は一も二もなく乗気になる。寝耳に水の私、そう簡単に受けられるものではない。ところがまったく有無をいわずに、既成事実となつた。直接電話で見本を要請される。前回と違って相手は素人、文句はない。早速原稿が渡され、印刷機を重役室に持ち込んで印刷、書き五年、刷り十年という難事、勿論刷りやを頼むと、値段は法外な数字、秘書の方が交渉して妥当な線にして下さる。運搬は社用車、社員並にパスも心配して下さる。さらに不得意中の不得意である宣伝まで部下の方に頼んでいたいて、大変な温床におかれる。

やがて仕事も一段落して、友人の計いで同じ三井ビルの印刷会社で一坪位の部屋を提供してい

ただ。ここでは客扱いの上に、必要な材料はじめ、かかり一切、出せとも云わなければ、出すともいわない。天下の三井ビルを根拠にしながら、ただ仕事をしてそれはそっくり儲けとなる。

そんな三十七年五月末、突然電話に出た私の耳に、

「東久邇でございます。家内の思い出の文が集ったのでぜひお願いしたい」

夢かとばかり馳けつけると、

「七月二十七日の一年祭に間に合わせてほしい」

とおっしゃるが、時間的にとても難しい。編集責任者は

「安田さんは人柄がいいからやっていただきたい」

とのおことばだという。宮様には、病夫を抱えての生活に、大いに同情をお寄せいただき、ずっと原稿はいただいているし、年賀状その他全部筆書きをやらせていただいている。しかもいつでも多少のミスは

「安田さんにして、なお叶わないことは止むを得ません」

決して失敗を責めたりなさらない、実に鷹揚、まこと王者の貫禄をお示しいただいて来た。

やってできないことはない!!と頂戴する。案の定、大変な苦しみをしたが、会社の重役の方の惜しみない御援助、御配慮があつて、二十六日完成したものは、宮様の御企画とは打って変つた、誠に重厚、かつ格式の高い堂々たる出来栄え、宮様は申すに及ばず、皇后様の御満悦一入だ

つたと洩れ承り、恐懼する許り……。その上一年祭にご一緒に参詣させていただいたり、見事な御品を頂戴したり……。

しかし、この約十年間の死闘は大変な肉体酷使だ。膝から下全部、皮膚がツルツルになるまで腫み、指は紅葉の葉のようにひろがる。それでも働かなければならない。靴に押し込むとはね返りが甲に出て謎のようにふくれ上る。とてもとても表現出来るものではない。そのため五十日も苦しんだり、目まいで倒れて肋骨を折ったり、風邪を引けば必ず高熱、身体がふるえる程苦しくても仕事はしなければならぬし、外出もしなければならぬ。耐えに耐えた。

裁 判

家なしになった三十三年からの苦しみは、曰く言い難い。必然性があつて永住を許された家は「居候」という言葉で追われ、仰天して救いを求めたのは夫がかつての知り合い、

「安田さんには長いこと大変お世話になりました。特別のことはできないが、いらしつて下さい」

思いがけない厚意に甘え、七ヶ月間事実居候、十月退院の夫と高円寺のアパート（夫の友人が地主・権・敷なし、相場より千円引き）に移ったが、六年目に娘が変つて家主になり、「改築をするので出てほしい」といわれた矢先、偶然家を買つてほしいという話で、直ちに中野へ移転する。

ところがそれが卑劣な畏^なであつた。やがて
「金は借りたものだ、返すから出て行け」

怒り心頭に発した私はがんとして応じない。予期した通り、裁判所からの呼び出しが届く。初めての経験、来るものが来た!!と思つて武者振いする。弁護士は奇怪な存在だと考えていたが、中には誠に立派な人がいることを知つたのもこの時、運悪く、大変私には合わない人に出会つたものだ。知らないということは悲しい。迂余曲折を経て、四年の後、とうとう最も危惧していた状態になり、本意は貫徹しなかつた。専門家から、「判決を待つべきだった」と残念がつていただいたりしたが、入院中の夫の臨床訪問が一過程となるのも好まないし、ギリギリまで追いつめるな!!というのが夫の気持、とうとう和解、そしてまたアパートへ、ここでも絶大な人情に救われ、八ヶ月無賃で置いていただく（入院中の夫に代り、飽くまで正義を主張した故、とのこと）。

何としても残念なのは弁護士としての態度である。弱い者いじめの最たるものだ。その上二年目に夫が入院してからは一切独り、偽は通らない法廷で四時間近くもしゃべりにしゃべつた。ほとんどの人が経験しないであろうことをやつてのけたあとは清々しい気さえするが、いやなものであることはたしかだ。低脳で小心、虚弱、まったく取柄のない私は府立第四高女を二度落第、背水の陣で創立直後で員数集めの府立青梅実科高女二年に編入、したがって中等教育三年でしかないのに、とにかく闘い抜いたことは嬉しい。多くの人に援けられたことを深謝する。

夫の死

昭和四十一年十一月半ば再び発病した夫は、近所の開業医の乱暴な加療で、見る間に悪化、急拠東京医大に入院、スト・マイのうち過ぎて極度の目まい、六ヶ月後に最小限度の動きが出来るようになったが、多くて十一種類、少なくとも六種類の服薬が災いして胃潰瘍を起した夫、痛みを訴えても問題にされない。視角をかえて看てもらおうと、福生、青梅と回つたがダメ、またもや東京医大へ行つたがやっぱり発見できない。「肋感神経病」と福生病院で診察もせずにいい放つた、乱暴な診断を踏襲した各病院、再度東京医大に入院をすすめられた。「今度こそ」と全幅の信頼を捧げた夫を、ものの見事に裏切つて、何をしても苦しみを増すばかり、最後の手段として直接胸にブロック注射、五回目に肺にささり、大変な呼吸困難、それも名目上の絶対安静だけで吸入さえしてくれない。やがて腰はぬけ、舌はもつれ、神経まで狂う。ただ異常な苦しみにあえぐ夫の哀願さえも無視、四十五年十一月二十二日、ついに七転八倒の苦しみ、しかし、担当医は顔を見せないために誰も手を下してくれない。二十四日教授回診への期待も裏切られ、ようやく来た担当医はまだ見当違いの、胸に神経病の注射。

午後五時半、手術の結果は、もはや腐乱状態で胃も腸も糸を引く度ボロボロと切れてしまつたという。猫の腸を肥溜の中に浸け込んだと同じ状態の腸はプヨプヨでいかのはらわた同様、腹膜

はすでに腫んで手のつけようもない。苦心惨胆の処置だったが……、と死の宣告、これが天下に名だたる東京医大病院で起った出来事、「生きたい」という夫、「生かしたい」という私の悲願も空しく、十五日間ほとんど狂い、メモリメモリと音をたてながら境界で隔てられてしまった。

「是非許して……」

と口止料の五万円を仏前に供えて、事足りりとする病院が恨めしい。

道端の草

昭和四十五年、五十八才でまったくの一人ぼっち、だが、時を合せたように、つい十一月から始めていた習字塾によって救われた。しかし、その一とき以外は辛い。まったく放心したように、あれほど好きな花も草も、鉢の中で夫のあとを追っていった。

それからは健康挽回のための毎日、薬害は夫の撤を踏みそうになり、教え子に相談した処、九十円の薬三回で胃を癒してもらい、専ら東洋的治療をうけつつ、現在に到っている。

人心地がついて見ると、なんとまあ短い持ち時間、あまりにも粗末にした自分自身をどう満足させようか。したいことばかり、ミシンは思いもかけないスクラップになってしまつて、最大の夢は破れる。「何々を預る、と契約してない」からだそうだ。手箱を開けても乙女の夢は消えている。地団太踏んだがまにあわない。

肉親の関係は儚い。

「花八ツ手の針坊主這う蛇一つ」「遅れ咲き百合純白を保ちけり」
かく生きた私、かく生きたい私。

「道端の草のように、お前の人生は踏んづけられ通しだね」と兄。

いみじくも……。言い得て妙、誠に私の生き方そのもの、しかし、しかし私はその度に根を張つた。強く、また強く……。葉も茎も傷だらけ息も出来ない。けれども強靱な根はいくらでも芽を吹く力を貯えた。先輩、隣人、友人、特に枚挙に^{いとま}不完的教え子の温情に支えられながら……。

歩いた道に悔いはない。歩かなかつた道にこそ大きな悔がある。借家という大きなハンディーも何のその、残された人生、残んの火をもやしながら勢いつぱい楽しみたい。

終つて

書くというルールも技巧も知らない私、表現も稚拙だし、言葉も乏しい。恥を書いたに過ぎないことを情なく思うのみ……。お笑い草に供します。